
私の猫はクリスチャン

暁 ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の猫はクリスチャン

【Nコード】

N94800

【作者名】

暁？

【あらすじ】

中学三年生の女の子未来は、両親が無く祖父・祖母、そして弟と暮らしている。拾ってきたクロという名の猫がいる。

そのクロに見込まれて？、未来は猫に変身できるようになる。そこで体験する猫や犬との会話、そして学校での出来事、友達との交流などから、成長していく姿をおもしろおかしくたどってみる。

簡単な紹介

私の猫はクリスチャン

*簡単な紹介

あたしの名前は、（みく）。未来と書いて（みく）と読むんだ。
進藤未来。

十四才！中学三年生になったばかりなんだ。

弟が一人いる。名前は誠。まこと

親父は、死んだ。

あたしが、小五の時、肝臓ガンで死んだんだ。

おふくろは、親父が死ぬ前に、離婚して出て行ったきり会ってない。
親父の親父、つまりおじいちゃん。それから、おばあちゃんと一緒に住んでる。

おじいちゃんは、六十過ぎてるけど、本屋さんをやってるんだよ。
従業員が、七人いる。アルバイトも何人が使ってるし、結構、儲か
ってるんじゃないかな。まあ、あたしは、あんまり興味ないけどね。
そうそう、おじいちゃんねえ、髪の毛を伸ばして、ポニーテールに
してるんだよ。

ポニーだよ。ポニー。銀白髪のパニー。鼻の下には髭。
それがね、似合ってるの。

背は、あまり大きくないんだけど、均整のとれた肉体で、背筋をぴ
んっと張ってるね。

格好いい、爺さんなんだ。

おばあちゃんは、家のお仕事。ハウスイフってやつだ。
時間にうるさい以外は、とても優しい婆さんだね。

料理は、上手いよ。あたしも、料理は好きだ。

将来は、料理家になるのかなあ、なんて思ってたりにして、へへへっ。
これが、あたしの家族だ。

ああ、そうそう、もう一人・・・一人というか、一匹忘れてた。
(クロ)という名前の、猫がいる。

名前の通り真っ黒け。右の前足の手の所だけが白い。
今年の初詣に行った時、帰りがけに箱に入れられて、捨てられていたのを拾ってきたんだ。

お爺とお婆は、黒くて気持ち悪い、と言ったけど、何とか口説いて飼うことにした。

そうそう、あたしね、おじいちゃんとおばあちゃんのこと、(お爺・お婆)って呼んでるんだ。

別に、生意気な気持ちで、呼んでるんじゃないよ。

親しみを込めて、呼んでるんだから、誤解しないでね。
住んでる所？

知ってるかな、石岡市っていう、茨城県の、丁度真ん中ぐらいの所で、田舎の小さな市。

あたし、歴史はあまり好きじゃないけど、昔は、常陸の国府があったらしくて、古い町みたい。国分寺とか、国分尼寺とかあったりして、国府城跡という史跡もあるよ。

まあ、今のあたしの生活には、関係ないみたいだけど。

あしたは、また学校だ。

勉強よりも、陸上の部活をやりについてるようなものだけど、嫌じゃないよ、学校は。

陸上の短距離には、ちょっと自信がある。

弟も駆けっこは速いんだよ。小学校でね・・・ああ、弟はいま小五五十メートル走の記録作ってたって自慢してた。七秒三だって、速いでしょ。

いつも、クロを追いかけて回して、遊んでるからかな。

だからと言って、勉強ができないわけじゃあない。

あまり家ではやらないけど、いつも、テストではいい点数をとってるんだ。

なぜか、判らないけど、頭はいいんだねきっと。

傲慢で言ってるわけじゃなくって。自分でも不思議に思うことがある。

勘も鋭いんだ。だからテストはほとんど山勘。それがまた、よく当たるんだ。

「……そういえば、クロ何処いったんだろ？」

あたしといつも一緒に寝るのにな……

まっ、いいか。今日は一人で寝るか。

「みく！ 起きなさい！ 誠！」

（んーむっ）

もう、朝か？ さっき、寝たばかりなのに。

「みく！ まことっ！」

「わかった！」

お婆は、少しうるさい。

「おはよう、みく姉……」

「あんっ。んっおはよう」

弟は、まだ寝ぼけ眼だ。そういうあたしも？ かな。

弟は、あたしの隣の部屋で寝ていて、起き出すと、まずあたしの所へやってくるんだ。

家はね、二階建ての家で、庭もちよっと大きいのがあってね、おば

あが、花や木の手入れをしてる。

「はやくしなさい！」

お婆だ。……うるさいでしょ。

トントントンッ！

「階段は、静かに下りなさい。」

「はぁーい。」

誠が舌を出して、あたしを見た。

あたしは、誠に舌を出し返し、首をすくめて席に着く。

テーブルの上に、オムレツ、キュウリと玉葱だけのサラダ、コーンスープが置かれている。

お婆は、（朝は洋風がいい）とか気取って言ってるけど、あたしは、どっちかって言うと、生卵かけご飯か納豆ご飯がいい。

でも、お婆の作るのは、美味しいから許してるんだ。んっ。

「顔、洗った？」

パンをオーブントースターに入れながら、お婆が言った

「洗ったよ。」

「口、ゆすいだ？」

「うんっ」

「早く、食べなさい。遅刻するよ。」

「いったきまゝす。」

いつも変わらない、朝の会話だ。

弟が、冷蔵庫から100%グレープフルーツジュースを取り出して、コップに注ぎ、一気に飲み干した。

「あゝっ！うめえ。」

これも、毎朝同じだ。弟は100%グレープフルーツジュースがな
いと、機嫌が悪い。

100%でなければだめだ。

あたしも時々飲むけど、確かに、身体がすっきりとするような気がする。

気がするだけだけど、弟に言わせると（元気の源）らしい。

お爺が、毎朝ヤクルト飲むのと、大して変わらないかも。

そのお爺は、きょうも、ヤクルトを飲んで出かけたらしい。

本屋の仕事は、結構忙しい。文房具も扱ってるから、朝の通学前には、店を開けているんだ。休みは、第一・三・五の月曜日。

「おいしいね。」

誠が、トーストにオムレツを乗せて口に運んでいる。

おばあは、いろんな料理を考えて作る。

きょうのオムレツは、とろけるチーズと、カルビーポテトチップスのうす塩味が、くだいて入っている。

ケチャップを、少しかけて食べると、美味しいからやってみるとい

いよ。

かつぱえびせんや、のり塩味もいいけど、あたしは、うす塩味。ああ、それからね。刻んだ、ネギを混ぜて作ったオムレツに、しょう油を、ちよつと垂らした大根おろしで、食べるのも美味しい。

キユウリと玉葱のサラダは、塩もみしただけで、好みのもので味付けして食べる。

あたしは、しょう油マヨわさび。

誠は、紫蘇ドレ、お婆は、かつおぶしとしょう油。

「ごちそうさま！」

「いってきまゝす。」

「いってらっしゃい。気をつけて！」

誠と一緒に出かけるけど、途中で、反対方向になるんだ。

あたしは、学校まで歩いて三十分ぐらいかな。誠は、もっと近い。

「みく姉。」

「なに？」

「きのう、クロ帰ってこなかったね。」

「そうだ、忘れてた。朝も居なかった。」

「あつ、そうだね。帰ってこなかったのか。」

「だいじよぶかな？」

「・・・だいじよぶよ。心配なし。」

「まだ、一ヶ月位だし・・・家が分かんなくなっちゃたりして・・・」

「そんなことねえだろう。」

と、元気に言ってみたけど、ちよつと心配・

「じゃあね。みく姉。」

「おう、がんばれよ。」

誠は、学校へ向かった。

あたしは、ここで、友達のリョ子と雅美と、待ち合わせ。

「おはよう！」

「おはよう。」

二人がやってきた。

「おはよっ。」

「みく！ あんた宿題やった？」

雅美が訊いてきた。

「えっ？ 何だっけ宿題？」

「理科の宿題あったじゃん。」

「ああ、あれかあ。んっ、やったよ。」

「あとで見せてよ。理科は、五時間目だし。」

「ああ いいよ。・・・涼子は？」

「あたしい？ 一応やったけど・・・」

「一応ね。」

雅美が言った。

ふたりは、あまり勉強が好きじゃない。あたしも好きな方ではないけど、結構おもしろいし、それなりに楽しんでるんだ。

涼子が、雅美の顔を見ていった。

「みくは、いいよね。頭がいいから。」

雅美が、同調する。

「うんっ。・・・なんでみくは、頭いいんだ？」

「別に、よかあないよ。」

「でも、なんでも出来るよね。」

「なんでかなあ」

ふたりの会話は、そんなことばっかしだ。話題を変えよう。

「ねえねえ、そんなことよりも、昨日、クロが帰ってこなかったんだ。」

「えっ？ クロって、あの真っ黒な猫？」

「気持ち悪いよね、あの猫。真っ黒で。」

「かわいいとこ、あんだよ。あれでも。」

「帰ってこなかったの、初めて？」

「んっ。」

「車に轢かれちゃったとか・・・」

雅美が、縁起でもないことを言う。

「えっ？ それはないよ。そんなこと言わないでよう。」

「だって、時々、轢かれた猫がいるじゃん。それに、まだ小さいし・・・」

「そうだけど・・・あれでもクロは、あたしの可愛いペットなんだから。縁起の悪いこと言わないでよ。」

確かに、学校の行き帰りに、猫や犬が車に轢かれて、ぺちゃんこになっていることがある。

あの猫や犬の飼い主は、何処にいるんだろうって、いつも考えてたんだよね。

だってさ、可愛がっていたペットを、三日も四日も、ぺちゃんこのままにしておけるか？

あたしだったら、絶対対つに！おけない！！

「あたしんちには、犬がいるけど あんまり好きじゃないな、動物って。」

と涼子が言った。

「涼子は、臆病だもんね。」

と雅美。

「臆病というか、なんか怖いよね。何考えてるか、わかんないんだもん。」

「それって、臆病なの。」

雅美が笑って、決めつけるように言った。

「そういえば、涼子。あんたって陸上の時、スタートでいつもドキドキしてるよね。」

あたしは、スタートの時、緊張してる涼子の姿を思い出して言った。三人とも陸上部なんだ。雅美は中距離。あたしと涼子は、短距離。

「・・・そうなんだよね。それで、スタートが遅れたりして・・・」

「はははっ。緊張のしすぎだよ。」

雅美は、何事も、あまり考えずに、なんでもやってみるほうなんだけど、涼子は、どっちかってゆくと、考えすぎの方かな。ナイーブ

ってゆうか、センチティブってゆうか。
でも、三人仲良しなんだ。

そのあとは、いつもと同じ登校の風景。
あしたになったら、忘れてしまいそうな、くだらない話をして、笑
いながら学校へ行ったんだけど、あたしの頭の中から、なぜか、ク
ロのことが離れなかったの。
心配というより、気にかかると言った方がいいかな。

校門の脇にある桜の木が満開になり、毛虫が、もぞもぞと上って
いくのが、目にとまった。

きょうは、月曜日で全校朝礼があった。

校長が、（あすなる）という木の話をしたんだ。

あすなるは、檜になろうとしたんだってよ。

あすは、ひのきになろう！あすは、ひのきになろう！あすはなろう
！あすなるっ！

と、一所懸命頑張ったんだって。

だから、皆さんも今日は駄目でも、明日も続けて頑張るように！と
締めくくった。

いい話をした後は、とても気持ちがいい。という顔をして、校長は
満足そうだった。

（馬っ鹿みたい！駄洒落だよ。檜は檜。あすなるは、あすなるだろ
うに。無理をしないで、自分の個性を出しなさい。あすなる君。）
と、あたしは思った。

が、前に並んでいる涼子は、感心して聞いている。先生の言うこと
には、疑問を持たないのだ。

隣にいる隆太も、うなずいて拳を振り、目を輝かせてる。

ああ。二人はあすなるに、洗脳されてる。

隆太は、学級委員長なんだけど、先生のいうことは、何でも正しい
と思ってる、学校側にとっては、とっても優秀な生徒なんだ。

ちなみに、あたしは副委員長。

知ってる？ 雑用係みたいなものよ、副委員長つて。職員室と教室を行ったり来たりして、メッセンジャー・ガールではないのだ、あたしは。

涼子が保健係で、雅美は生活委員。

笑っちゃうよね、すぐ、パニツクになる涼子が保健係で、身だしなみにも無頓着な、男勝りの雅美が、生活委員だつて。

まあ、そうゆうあたしも、適当に雑用係をこなしてるけどね。

ああ、退屈な歴史の時間が終わった。

あたしね、歴史の話は好きなんだけど、年号を覚えるのが苦手なの。何があつたかの、順番は判るんだけど、年号がねえ。

それに先生が教えるのは、誰が、何を、何年にやって、何が出来た。とかいう話であつて、どうして？とか、なぜ？とか、どんな人物で、どんな家族でなんて、あまり話してくれないんだもん。

正倉院を造つたのは誰？

あたしは断言する。腕のいい大工さんだ。

明智光秀が、織田信長を殺したのはなぜ？

あたしは思う。（あんた、やっちゃいなよ。）と女房にけしかけられたのだ。

事實は、わからないでしょ。その時に生きていた人、今いないんだもん。

文献と推察と想像でしか、歴史は存在しないのだ。年号と人物だけなんて、あきちゃう。

次は、数学だ。

（クロ、どうしたかな？）

「進藤！この方程式を解いて。」

先生の声が耳に入った。

あつ、いま授業中だつて。

方程式か。しょうがねえ、やってやるか。

黒板に向かって行き、答えを書いて戻ってきたら、

「答えだけじゃなくて、式も書いて。」

だつて。

上等じゃねえか、やってやるよ。

（それよりも、あたしはいま、クロのことが気になってんだからね。）
（と言つてやつても、無駄なことは判っている。）

$$2x + 10y \parallel 54$$

$$Y \parallel 2 \cdot 5x$$

$$2x + 10(2 \cdot 5x) \parallel 54$$

$$27x \parallel 54$$

$$x \parallel 2$$

$$y \parallel 5$$

「よしっ！ よく出来た。」

（よく出来ただあ？ 小学校の復習でしょう。受験勉強のための。・・
・それよりクロだよ。んっ当に！）

クロのことを考え続けて、数学の時間が終わった。

昼休みだ。お弁当を広げた。

相変わらず、お婆の作ったお弁当はきれいだ。

小さな、俵方のおにぎりが4個。

紫蘇を混ぜたのと、高菜の漬け物を混ぜたのと、鮭を混ぜたのと、
ゴマをかけたのが、入ってる。

おかずは、レタスを敷いて、その上に豚の角煮がふたつのっている。
それから、ほうれん草を玉子で巻いたものと、ひじきの煮物だ。

きゅうりのぬか漬けと、梅干しも入ってる。梅干しを入れておくと、
ご飯が悪くならないんだって、お婆が言ってた。本当かどうか判ら
ないけどね。

涼子と雅美は、コロツケパンと、牛乳を買ってきた。

一緒に食べたけど、今日は、何故か美味しく感じなかった。
きつと、クロのことがあったからだね。

何処で何をしてるのかなあ、とか、何を考えているんだろう、とか、

気になっちゃって。

「みく！宿題見せて。」

「おうっ」

雅美が、あたしの理科のノートを持って行った。

きょうの理科の授業は、動植物の系統だ。あたし、理科の授業好きだ。だって、いつもあたしの頭の中に、疑問を残してくれるんだもの。

先生は、決まったことのように、教えてくれるんだけど、不思議がいっぱい。

小学校の時、

上空の水蒸気が、空気中の眼に見えない塵にまとわりついて、雨となって降ってくる。

気温が下がれば雪になる。

と、先生が教えてくれた。

不思議だ。中学生になつたいまでも。

あたしが、

（眼に見えない塵って何だ？）

（雪になる過程は？）

（霰は？ヒヨウは？）

（気圧との関係は？）

（地表との関係は？）

と、しつこく質問したら、あきらかに嫌な顔をして、適当に説明して（時間がないから次に進む。）ときたもんだ。

（だって、あたし、雨になる瞬間見てないもん。霰だってヒヨウだって、出来るところ見てないもん。）

と、言いかけて、止めたことがある。

「種・属・科・目・綱・門　そして、それぞれに亜がある。人間は、動物門、哺乳綱、哺乳目、ヒト科、ヒト属、ヒトだ。」

先生が、（私は知っているのだ。）と自信を持って、不敵な笑いを含んで説明している。

（そうか？どうして、自信を持って言えるのだ？）

（それでいいのか？）

（誰が、何の権限があつて、決めたんだ？）

あたしの頭の中に、疑問さんがアポイントなしにやってきた。あたしは、優しく招き入れて、先生の声を遠くに聞きながら、疑問さんと話をすることにした。

（黒人や白人の違いは何だろうね？）

（んゝむっ？亜種か？）

（何で、亜科じゃないんだ？ 亜属でもいいだろ。）

（うんっ。白人だつて北欧系・北米系・その他諸々、黒人に至つては、かなり異なつた人種がいるよね。黄色人種だつて・・・なんだ？）

（先生に、質問してみるか？）

（・・・やめとくよ。だつて、気候がどうの風土がどうの、つて言うに決まつてるもん。）

（そうだな。ロシア系の太つた白人と、墨汁より黒い南アフリカの黒人と、ホッテントットが、同じヒトと、言うに決まつてるよな。）

（違ふと思うんだけどね。どれが優秀とか、未来的とかゆうんじやなくて・・・）

（牛や馬も、そうだろう？）

（そう、なんだよね。蹄が一つだから奇蹄目で、二つだつたら偶蹄目。蹄が二十一個あつても奇蹄目だよ。だつたらさあ、眼が二つだから、二眼目とか、鼻が一つだから、一鼻属にしたら、一つに纏まつちゃうだろうよね。もう少し細かく別けて、二足科・四足科・六足科・八足科・百足科つてのもあるわよね。無眼目・百足科・属ぞくつ・ムカデなんてね。）

（何だ？属ぞくつて。）

（だつて、気持ち悪いじゃん。だから、ぞくぞくつて。）

（なるほど。水目・陸目・空目つてのもあるな。）

（おもしろいね。毛無し属に、毛有り属。）

「進藤！何をニヤニヤしてるんだ？爬虫類と、ほ乳類の心臓の違い

をいってみる。」

疑問さんとの楽しい会話を、先生に邪魔されてしまった。

「一心房二心室、二心房二心室。」

「よしっ！」

（よしっ！！だって。同じ、ヒト科ヒト属ヒトでしょ。何様のつもり？）

（はははっ、むきになるなよ。）

よかった、まだ疑問さんは帰ってなかった。

（一心房一心室の方が、単純でいいんじゃないのか？）

（そうだよ、病気も単純で少ないと思うわ。）

（生きていく上では、魚の方が、ヒトより進んでいるかも？）

（そうよね、心臓なんてただのポンプだもん。食べるものにしたって、口に入るものは何でも食べるし、・・・魚って、好き嫌い・・・あるのかなあ？）

（俺は、小エビの方がいいな。プランクトンは、どうも、食った気がしねえ。なんてな。）

（朝、昆布食べたから、夜は、ウミウチワにしようかな。）

（いや、今が旬のウミブドウにしよう。）

（でも、みんな塩味で身体に悪くないかしら？）

ピリリンポーンッ

「時間です。きょうは、これまで。」

授業が終わって、疑問さんも帰った。

六時間目は体育で、その後、着替えずに部活のために部室へ行った。一年生が、そろそろとやってくる。

今年の新入部員は三十八名。二年生が十九名で、私達三年生が、二十三名いる。

新入部員が、何人残るか判らないけど、短距離に、結構凄い男子と女子が一人ずつ入ってきていた。

雅美も、中距離に有力な新入生がいると言って、毎日、しごくのを楽しんでいる。

あたしは、しごいて嫌われた上に、あたしより速くなっちゃったら嫌だから、しごきとゆう名の指導は、しないことにした。

スタートの練習をしてるとき、クロと同じような格好をしてることに気づき、

（きょうは、帰ってるかな）

と思ったら、やっぱり、家に帰ると誠と遊んでいた。

「帰ってるじゃん。」

「ああ、帰ってたよ。心配で早く帰ってきたら、縁側で日向ぼっこしていた。」

「まさか、早退したんじゃないでしょうね？」

「違うよ、クラブやらないで、帰ってきたただだよ。」

「ふ〜ん。それならいいけど。」

あたしも、鞆を置いて、着替えて、手を洗って、うがいをしといて、長い道程をえてから、クロの所へ行った。

それらのことをやらないと、お婆がうるさいんだよね。

お婆は、いま買い物に行ってるんだけど、居なくても、習慣になっ
てしまってる。

「あまり、かまうなよ。」

「だって、可愛いんだも。」

「可愛いくても、クロは、遊びたくないかもしれないだろ？」

「みく姉は判るのかよ・・・クロの、考えてることが？」

「・・・なんとなくね。」

「クロはいいよな、学校もないし、寝たい時に寝て、食べたい時に食べる。」

「ミャ〜オ!」

「ほらね!そうだってさ。」

「違うよ。クロには、クロのクロウ（苦勞）があるって言ったんだ。」

「はははっ。猫がしゃれ言うのかよ?」

「ミャー。」

「ほら、言つて言つたろう。」

あたしも誠も、クロに癒されている。

飼うのに反対だった、お婆だってね、クロのご飯、一所懸命に、作っちゃたりしてるんだよ。

お爺も、休みの時なんかね、膝に乗せて、クロが（ごごろごごろ）と喉を鳴らすのを聞いて（ふふむむ）なんていつしよに、鼻を鳴らしてるんだから。

お爺もお婆も、癒されてるのだよ。そうに、違いない。

あたしは、猫や犬は大好きだ。

何となくだけど、考えてることが、判るような気がするから。

総体的に、蛇と毛虫以外の、動物は好きだけど、ネコ科とイヌ科の気持ちは、判るような気がすると思ってる。

鳥は、判らないな。

中でも、フラミンゴなんてさ、他の奴のまねして、右へ行ったり、左へ行ったり。

自分ってものがないよ、自分ってものが。

でも、フクロウや鷲みたいな、猛禽類は判るな。自分があるもの。

猫や犬と同じ、ほ乳類でも、キリンとらくだと、鹿は判らない。

キリンが、水を飲むときの格好、知ってる？

足を広げるんだよ。身体の割には細い、あの足を、お相撲さんの、股割みたいに。

そいでもって、あの長い首を、前に倒すの。

自分の首の長さが、判らなかつたら、水たまりに、上手く首をもつてくことが、できないでしょ。大変だよね。

水ぐらい、簡単に飲める身体の作りに、すればいいのにな。

らくだのこぶは、なぜ背中にあるの？

水が入ってるとか、脂の固まりだとかいうけど。

だったら、無理して、背中に出さなくなつて、内臓器官にしておいても充分じゃん。ねっ。不格好だよ。

それに、やたらとよだれを出してるし、牛よりひどいよね。あの、

よだれ垂れ流し咀嚼。

あたしがやったら、行儀が悪い！って、お婆に怒られちゃうよ。鹿はさあ、おどしすぎだよな。

物音や気配に敏感でさ、きよろきよろしてさあ、走って逃げるの。出てくるなよ。臆病者！

「ふっミヤゝゴ！」

「何笑ってんだよ。クロ！」

「ニヤ・ニヤ・ニヤゝ」

クロが仰向けになって、お腹を出して、喜んでるみたいだ。

「ご飯にしよう！手を洗いなさい！」

お婆の声に、クロが、体勢を立て直して駆けだした。

あたしの家の、晩ご飯は、少し早いんだ。七時になったら食べる。

お婆は、時間にうるさいからね、ずれがあっても、一分か二分。

その時間に、お爺が帰ってきて、一緒に晩ご飯を食べるの。

お爺は、食べた後、また本屋さんに戻って、九時ぐらいに帰ってくる。

用事がないときは、お昼も、家で食べるんだよ。

仲がいいんだ、お爺とお婆。

クロの後を追いかけて、庭から家の中へ入った。

カレーの匂いがだだよってきて、らくだのようによだれが・・・、

ああ、カレーは香りだけで、あたしを、牛やらくだにしてみよう。

誠は、すでにテーブルの前に着席して、スプーンを持ち、臨戦態勢に入っている。

お爺も、白い口ひげを撫でて、つばを飲み込んで、胃袋へカレーの突入を容易ならしめるよう、指示を出した。

あたしの家族は、カレーが大好き家族だ。

きょうのカレーは、何だろう？

目の前に運ばれてくるのが、楽しみだ。

お婆は、その、みんなの顔を見るのが楽しみで、運ぶのを手伝えとは言わない。

クロは、台所で、キャットフードを食べている。

おおっ！出てきた出てきた。あたしは、完全にらくだ状態。

きょうのカレーは、挽肉カレーだ。

豚挽肉と牛挽肉を、みじん切りにしたニンニクと生姜、それから多めの玉葱と一緒に、バターで炒め、完熟トマトとワインで煮込んでチーズを入れる。市販のルウだけど、お婆は、香辛料とお醤油とお砂糖を追加して入れる。お味噌もスプーン一杯、入れているという噂だ。とにかく、旨い！

野沢菜と、高菜の漬け物が、細かく刻まれて、テーブルの中央に置かれた。

「さあ、食べましょう。」

お婆は、みんなが、つばを飲み込んでるのを見て、満足したようだ。「いただきます！」

言うより早く、誠が、野沢菜に手を伸ばした。

あたしも高菜に手を伸ばしたが、高菜の入った器が、ずっと、お爺の手元に引き寄せられた。（やられたっ！）ひと指、遅かった。

あたしが、高菜に手を出すのを、心得ている。お爺も、さるものひつかくものだ。

仕方がない、らくだになったあたしは、口を半開きにして待つ以外に、手はない。

待っている三秒ぐらいが、長い長い、拷問のようだ。

もし、あたしが、悪いことをして捕まったら、カレーを目の前に出してください。きつと、知らないことまで、白状するだろう。

あたしの手元に廻された器から、高菜を、こんもりとカレーに乗せて、一口よだれの中に混ぜてあげた。

ああああ。この世のものとは思えない、心地よさ！

挽肉カレーには、高菜だ。誰がなんと言おうとも。

バターで炒めた、玉葱の甘さの中に、ニンニクと生姜の香りが漂い、挽肉を包む。

ときおり、チーズとトマトが訪れて、戯れる。

カレーの芳醇な香りと、舌と鼻腔を、くすぐるように刺激する辛さ。そして、主役ともいえる、脇役の高菜が、しゃきつしゃきつと、音を立てて、漬け物独特の香りと、味を放出する。思わず、くだらない料理評論家になってしまふ。ああ、くそっ！旨い。

見事な競演の、虜になったあたしは、ひたすら、スプーンを口に運ぶ単純作業を、黙々と繰り返す。この規則正しい作業は、時給いくらになるだろう。

「おかわり！」

「儂もだ。」

誠とお爺の声が、遠くで聞こえる。

あたしも、二皿めを堪能して、長くて短い、幸福に満ちあふれた時間が、終わった。

「やっぱ、野沢菜だね。」

「いや、高菜だよ。」

誠とお爺の、漬け物談義が始まった。

挽肉カレーのあとは、いつも同じだ。

あたしとお爺は、高菜派。誠とお婆は、野沢菜派。

野沢菜も美味しいんだけど、漬け物の香りが強い高菜の方が、あたしは好きだな。

お婆は、いろんなカレーを作る。

別に習ったわけでもなさそうだけど、料理は、本当に上手い。

残った挽肉カレーをね、スパゲッティにかけて、蕩けるチーズと、パン粉をかけてオーブンで焼くと、これまた美味しい。

茄子を入れた、茄子挽肉カレー。

カボチャを入れた、かぼちゃ挽肉カレー。

お豆を入れた、豆挽肉カレー。

苦瓜を入れた、苦瓜挽肉かれー。

オムライスにかけて、オムライス挽肉カレー。

がんもどきと、はんぺんと、玉子と、蒟蒻にかけて、おでん挽肉カレー。

挽肉のカレーだけでも、かなりのレパートリーがある。

でも、一度、納豆と混ぜたときは、ちよつと失敗したかな。

一ヶ月に二回は、必ずカレーなんだけど、鶏を丸ごと入れて、スー
プ風にしてみたり、牛タンを使ったり、イカ墨で、真っ黒な海鮮カ
レーを作ったりする。

材料によって、辛口と中辛、甘口と混ぜたりしているみたい。

挽肉カレーは、辛口だ。

豚骨スープのカレーなんてね、絶品だよ。カレーのリゾットも、美
味しかったな。

あたしの家族は、食べることが大好き。

お爺も、食べることにお金をかけることは、惜しくないって言うて
る。

そのお爺は、グリーンサラダを味塩だけで食べている。

誠は、三杯目のカレーに着手して、スプーンを、規則的に口に運ぶ
という作業を、続けている。

あたしも、と思ったけど、太り過ぎに要注意と、頭の片隅で、黄信
号が点滅したので止めた。

口の中に残る、様々な香りと味に、別れを告げるように、サラダに
胡麻ドレをかけた。

「ごちそうさま！」

お爺が、茶の間に入って、NHK7時のニュースの続きを見る。

晩ご飯の時も、付けてるんだけど、食べる方が優先でね。よっぽど
の重大ニュースがなければ、テレビには、振り向かないな。

あたしも隣に座って、一緒に渋茶をすすりながら、ニュースを見る
のが日課だ。

これと言って、あたしにとっての、特ダネはなさそうだ。

クロが入ってきて、あたしの膝の上に乗った。

気持ちよさそうに、ぐぐるると、喉を鳴らしている。

おいおい、動こうとしても、動けないじゃないか。

足がしびれてきた。

あたしは、クロを抱いたまま、自分の部屋に入った。

お爺は、本屋さんへ戻り、お婆は、晩ご飯の後片付けをしている。誠は、さっさと自分の部屋に入って、宿題に手を付けている。

あたしは、宿題はないんだけど、一応受験生だからね。少し、勉強でもするか。

クロはベッドに置いたら、丸くなって目を瞑ってしまった。

いつでもトイレに行けるように、ドアは、少し開けてあるんだ。

「なんだよ、クロ。」

クロが、突然、机の上に乗ってきた。

「ミヤ、ミヤ〜グロ。」

「何だよ？鼻の頭、舐めるなよ。」

あたしの鼻を、舐めてやがる。舐め返してやるぞっ。

「えっ？何？どうしたの？・・・」

目の前に、机の引き出しが見えた。

しかも、でかい。

「ぎゃ〜ああ〜！」

上を向くと、クロが、でかく見える。

「みく。おミヤーが、小さくなったんだよ。おいらが、おつきなつたんじゃニヤーよ。」

「なっ、なんだ？クロ。おまえがしゃべってるのか？な、なんで、しゃべれるんだ？」

「よく、見ニヤよ。」

「見ニヤって、何を？・・・んっぎゃ〜！！！」

「うるさいニヤ〜。」

「猫だ！！！！」

あたし、猫になってる。手が、足が・・・んっ？三毛猫だ！

「あばっ？ぶっ？？？？」

夢だ！そうに、違う。ほっぺをつねねば判る。

「つねねな〜い！爪が、爪がイタ〜い！」

「うるさいやつだな。おミヤーは、猫になったの！！！」

「・・・へっ？」

「みくは、見所のある奴だと思ったから、おいらが、猫にしたの。」

「やだっ！ーあたし、人間！ーヒト科ヒト属ヒト！ー！」

「心配するなよ。また、ヒトに戻るから。」

「戻して！ー！」

「やだニヤ。」

「おいっ。クロー！」

「おいらの話を、聞けよ。」

「やだよ。あたし、猫好きだけど。あたしが人間で、猫が猫だから、すきなわけで、猫になったら、猫が好き？・・・ああ、あたし何考えてんだ？・・・あたしのパジャマは？さっきパジャマに着替えたはずだよー・・・なんで、あたし、後ろ足で、耳の後ろ掻いてるんだ？・・・違う。後ろ足じゃなくって足！ 足？ ええっ？

「うるたえるな、みく！ー！」

「はいっ。」

「つて、返事しちゃったよー」

「見所のあるみくに、いろんなこと教えてあげるよ。」

「だつてえ。」

「しょうがニヤー、な。」

クロが、猫になったあたしの鼻を舐めた。

戻った！あたし、人間です。

「???、なんだ、いまのは？」

「ミヤー」

「ミヤーじゃなくつて、しゃべれるだろう、お前？」

「フミヤー」

「だつて、さっき・・・？・・・ああ？・・・あたしが、猫だったから猫、語がわかったのか？・・・ええっ？」

訳が、わからない。

「ミヤー。ミヤー。」

「ほんとなの？」

「ンツミャ！」

「・・・ねえ、クロちゃん。・・・も、いつかいやって」
「ミャオ」

あたし、猫になれる。

おもしろい。

クロがね、いろんな所、連れて行ってくれるって、猫として。

いろんなこと、教えてくれるって、猫として。

一緒に遊んでくれるって、猫として。

明日からだって、言ってた。

あたし、楽しみになってきちゃった、猫として・・・ヒトとして。

猫の集会

*猫の集会

今日は、学校が終わるのが、待ち遠しかった。

こんなの初めてだよ。誕生日だって、こんな気持ちにならないもん。部活も、そこそこにして帰った。涼子と雅美が、ちよつと、むつとした顔をしてたけど、

（帰ってから、猫にならなきゃいけないの）って言っても、絶つゝ対！に、信じなでしよう。だから、ごめん。

「ただいまっ」

「ああ、おかえり。手、洗って！うがいしなさい！」

ああ、お婆は、毎日同じことを言う。

でも、言われないと、何か物足りないから不思議だ。

「みく姉！何やってんだよ。」

誠が、もう帰っている。

「何って・・・何？」

「何で、制服を鞆に入れてるんだよ。それに、Ｔシャツ！反対に着るなよな。」

「えっ！やだ、あたし・・・そんなことしてな・・・あれっ・・・してる。」

「もゝっ。何か変なもの、食べてきたんじゃないの？」

「ふっ」。落ち着け！落ち着くんだ、未来！」

「今度は、何、ぶつぶつ言ってるんだ？」

「いや、何でもない。何でもない。」

可愛い弟でも、話せないことはあるんだ。

「ご飯よっ！」

六時だ。よしっ、後三時間。クロとの約束は、九時だ。

あっ、クロはどこだ？

「クロ、どこにいる？」

階段を下りながら、そつと、誠に聞いてみた。

「さつき、ソファで寝てたよ。」

そうか、よかった。

晩ご飯は、ホツケの干物とけんちん汁に、菜の花のピーナッツ和え。漬け物は、キュウリのぬか漬け。

「さあ、食べるか。」

お爺が、箸をとった。

「いったただつきまゝす。」

美味しいんだな、これが。やっぱ、あたし、食べること好きだわ。しばし、猫になることは忘れて、堪能しよう。

ホツケは、どうして、身がこんなにきれいに分かれて、取れるんだろつ。

一枚一枚、はがすのが、おもしろいんだよ。

お爺が、くしゃくしゃの顔をした、大福さんみたいになつてゐる。

いくら好きで、美味しくても、そこまで顔を崩すことは、ないと思うのだが。

「みく。ニヤニヤ笑いながら、食べるんじゃない。よだれを、拭きなさい。」

いけねつ、あたしも、お爺のようになっていたのか。

「はははつ。でも、美味しいよな、ホツケ。」

誠も、一枚ずつはがしてる。

そうなのだ、たとえば、顔が崩れようと、旨いものは旨い。

この皮に、くつついたところが、ほどよく脂が乗って・・・とほほほ。

皮もまた、この少しこげたのが、・・・んっ！何とも言えない。炊きたてのご飯に、ぴったんこ。

あつ、そうそう、けんちん、けんちん、

お婆の、けんちはね、里芋、ごぼう、人参、大根、蒟蒻、豆腐、油揚げ、ねぎ、それに、薄切りの豚肉が入ってる。

それぞれが、妙にマッチしてるんだな。

味噌が入って、ちょっぴり甘めの味付けで、胡麻の油がたらしてある。

里芋が、ほっくりんこ。豆腐が、ぐしゃりんこ、油揚げ、じゅわりん。蒟蒻、こんにゃき。ごぼうに、人参・大根。

「みく。お爺さん。そんなに、がつくんじゃありません。」

お爺と、顔を見合わせてしまった。

おいおい、髭に、ささがきごぼうが、ぶるさがってるぞ。

「みく姉。口の脇に、お豆腐ついてるよ。」

しまった！あたしもか。

ピーナッツの香りと春の風を、いただき。きゅうりのぬか漬けが、口の中を締めた。

満足、満足。満ち足り、満ち足り。

「ごちそうさま。」

「みく。ホツケの骨と頭、クロにあげておいて。」

「は〜いつ。」

クロは、大体、台所の隅のカーペットの上か、洋間のソファの上で丸くなってるんだ。

熟睡体勢にはいると、身体を、仰向けにして、真っ直ぐにしてたりもするよ。

「クロ〜ッ」

「フミヤア〜ッ」

「はいっ。ホツケだぞ〜っ。」

「ホキヤ〜ゴォ！」

「おまえも。ホツケ、好きだよなあ。」

「ツキニヤ〜ギョ。」

「よしよし、九時だぞ。」

「オ〜ッ〜ミヤ。」

さあ、お風呂に入って、宿題やつちやおう。

「あら、めずらしいね、早くお風呂に入っちゃうなんて。」

お婆が、ソファでめがねをかけて、新聞をよんでいた。片付けは終

わったのかな？

「うんっ。きょうは、疲れたから宿題終わったら、直ぐ寝るね。」

「ああ、そうしなさい。誠にも、早くお風呂に入って、早く寝なさい。って、言っておいて。」

「イエスッ。マイ・ボス！」

「センキュー。マイ・ダウターア。」

お婆は、英語が上手いんだ。ジョークも判る。お爺の教育の賜かな、なんちって。

「誠っ。お風呂早く入って、早く寝なさいってよ。」

「わかったっ。」

「あたしも、きょう、早く寝るからね。うるさくしないでよ。」

「わかったよ。」

ドア越しの会話で、行動前の、アリバイ工作を完了。

本当は、あたし寝ないで、猫になるの。

はははっ、楽しい夜になりそうだ。って、化け猫じゃないからね。本当の猫に、変身しちゃうんだから。

時計の針は、9時3分前を指している。足音もなく、階下へ降りたあたしは、迷うことなく、台所へと向かった。

人の気配はない。遠くで、犬の遠吠えが聞こえている。

ついさっきまで、楽しい食事を囲んでいた台所には、まだ、ホッケのにおいが漂っていた。電気の消されたダイニングに、人の気配はない。

「何してるの？」

「えっ！？・・・み、み、みず。」

「ミミズ？どこに？」

「ちがあう！ 水飲んでから寝ようと思ったの。」

「あっ、そう。片付けておいてよ。お婆ちゃんも、寝るから。」

「んっ。わかった。」

ああ、びっくりした。お婆ちゃんったら、音もなく忍び寄ってから。もおお！サスペンスな動きはやめよう。

「ミャー、ミャー。」

クロが足元に、やってきた。

抱え上げると、あたしの鼻の頭を舐めた。

「グミャツ。」

床に、あたしとクロが四つ足で立っている。？立っているで、いいのかな。

また、猫になれた。

「どう？みく。心の準備は？」

「大丈夫だよ。・・・あたし、三毛猫だったんだね。」

「ああ。さあ、行くか。」

クロは、椅子に飛び乗って、調理台までジャンプした。

「・・・」

「なにしてんだ。みく。」

「なにつて・・・あたし、そんな高いところまで、ジャンプできないよ。」

猫になつてみると、椅子が、やたらと、でかいんだもん。

「何、言ってる。おまえは、猫になったんだぞ。」

そつ、そうか。あたしは、猫になってたんだ、思い切って、一丁やってみるか。

「ンツ！ニユツ！シャーツ！！」

軽～い。あたしの身体が、軽～い。

一気に、クロのどこまで行ってしまった。

自分に、拍手しようと思ったら、尻餅をついてしまった。

「みく。前足を二本、同時に上げるなよ。バランス崩すから。まだ、

猫の身体に、馴染んでないんだから、気をつけな。」

「へへへっ。」

キッチンの窓は、いつも、少しだけ開けてある。

クロが、出入りできるようにしてあるんだ。

そこから、二人で、・・・いや、二匹で飛び降りた。

猫の身体って、すごいよ。バネってるもん。

指先から肩まで、全部、バネじかけみたい。

「どこ、行くの？」

庭を横切って、フェンスを抜けたところで、聞いてみた。

「集会。」

「集・・・会？」

「ああ、宮本さんちの、隣の空き地でやるから、みんなに、紹介するよ。」

「はっ？み・ん・な？」

「ああ、この地域の、会長は、寺田さんちのイノスケという猫。」

「ワッソオ。イノスケ？行司さん？」

「んっ？飼い主さんの付けた名前が、通称になっている。」

「なるほど。寺田さんって、大の相撲好きだもんね。わかるわ。」

「おおーい。クロ！」

「やあ、シロにタロー。これが、例のみくだ。」

「これ？例の？」

「やあ。」

「おっす。」

「や・・・やあ。」

「今夜は、26匹位、集まるよ。」

「そうか。」

空き地までは、150メートル位かなあ。あちこちから、猫がやってくる。

「集会は、9時20分からだよ。」

シロが鳴いた。じゃなくて、言った。

「はい！クロ。」

「・・・やあ。モモ。」

真っ白で、しっぽの長い猫が、クロにすり寄ってきた。

「あっ！この猫が、みく？」

「あ、あたし？そ・・・そう、みくです。」

「けっこう、可愛いじゃん。毛並みもいいみたい。ずっと、猫にな

「つちゃえば。」

「えつ。ずっと、猫？・・・それも、どうかなと・・・」

空き地に着いた。いっぱい猫がいる。いろんな猫、ネコ、ねこ。猫だけど、よく見ると、顔も体つきも違う。

人間の時は、気がつかないけど、やっぱり違うんだわ。

「んっほん。ぺっ！今夜は、集まってくれて、ありがとう。」

痰を吐いて、しゃべりだした、その雄猫は、見たところ50才ぐらいかな。

「クロ。猫も痰を吐くのか？」

「当たり前だろう。くしゃみもすれば、鼾もかくよ。人間のすることとは、いいことも悪いことも、同じようにするよ。」

「ふっんっ。そっかぁ・・・」

「黙って、聞いてなよ。」

「OK。」

「今日の集会の議題は、環境の問題です。皆猫様、どうか、忌憚のない意見を述べ合い、討論していただきたい。」

「げっ？・・・環・境・問・題？　なんだ、それっ？　むっずかしい」。

「・・・みく。真面目に考えてくれよな。人間にとっての問題は、俺たち猫や、犬属・鳥属にとっても、大問題なんだから。」

「んっむっ。それは、もっともな話だ。」

あれっ、腕組みが出来ない。あっ、そうか。あたし猫だ。仕方がない、肉球でも舐めよう。

「んっほん。ああ、その前に。新猫を紹介します。皆さん、仲良くしてやってください。最初は、誰？・・・えっ・・・あっ、そう・・・ええ、最初は、鈴木さんちのイチロー君。次は、南さんちのサマンサさん。最後に、進藤さんちのみくさん。それでは、紹介者の猫様と一緒に、よろしく願います。」

すっごい、人間の集まりより、しっかりしてるじゃねえか。

「皆猫様。こんばんは。おれは、寺門さんとこのゲンキです。新し

い友達のイチロー君を紹介します。種類は、アメリカン・ショート・ヘアーです。イチロー君は、最近アメリカからやってきたので、まだ、日本の猫言葉が、あまりうまくありません。仲良くしてやってください。では、イチロー君、一言お願いします。」

「すっげー。アメリカかよ。英語話すのかな。」

「そりゃ、そうやる。わしゃ、まだ関西弁やからな。」

隣にいた虎猫の、タイガーが言った。

「ふんっ。・・・なぜか、納得しちゃうな。」

「Good evening! every cat。」

「わおっ！ イングリッシュ！」

「アーツ、ワタシュ ハイッチロー デッス。ヨロシク、コンバンワ。」

「かつこいいなあ、アメリカン・ショート・ヘアーって。今度、英語、教えてもらおう。」

「そうだな、あいつも、日本語の勉強になるしな。」

「ありがとうございます。次は、サマンサさん。」

「おこんばんは、皆猫様！あたくしのことは、ご存じよね。南のところの、イメルダさまです。こんど、宅にスコティッシュフォールドのミス・サマンサが、来たのでさまあすのよ。ヨーロッパに住んでたんざあますが、日本猫語は、お上手でらっしゃるわ。よろしくね、皆猫様。それじゃ、サマンサ・・・」

「ハ～イ、わたし、サマンサ。」

「・・・へっ？それだけ？」

「はい、ありがとうございます。では、最後にみくさん。」

「おいっ、行こう。」

「恥ずかしいな。アメリカに、ヨーロッパだよ。」

「何言っただ、おなじ猫だ。ほらっ、行くぞ。」

「えっー、僕は・・・」

僕だって、気取ってるクロのやつ。

「・・・進藤さんのクロです。みくは、雑種の三毛猫で、田島さ

んとこのサブロウさんと同じで、人間です。」

「えっ？雑種？人間？・・・ば、ばらしていいのかよ？・・・あたしと同じ人間？が、いる？・・・」

「僕を、拾ってくれたのが、みくであります。では、みく・・・」

「はっ。・・・えっ、えくと・・・みくです。猫になって二回目ですが、これからも、猫になると思いますので、よろしく。」

「んっほん。ああ。では、環境問題に入ります。」

すごい。たぶん、人間の目から見たら、猫がいっぱいいいて、ニャーニャーうるさいと思ってるんだろうね
でも、違うんだな。

紹介し合っちゃったりして、そいでもって、環境問題だよ。

あたしも、思わず聞いっちゃたりしたの。

「はい。」

黒と白の混ざった猫が、手を・・・じゃない。右前足を、ちょっと上に上げた。

「ハチさん。何か？」

「ええ。最近の人間社会では、二酸化炭素の排出などで、世界的に環境問題に取り組んでいるようではありますが、・・・京都議定書によれば・・・」

わくっ、何で知ってるんだ。猫に関係あるのか？

「・・・この問題は、人間に任せるしか、手がないと思います。そこで・・・」

「ちよつと、待って！」

「はい、ミミさん。」

「わたしも、長いこと猫やってるけど、人間に任せておくだけじゃ、駄目だと思いますよ。」

「しかし、二酸化炭素の問題は・・・」

「それって、ただ、二酸化炭素だけの問題じゃないと思うんだけど。」

「んっほん。では、何が問題だと。」

「人間は、第6の感覚も、自然予知能力も失せてるから、自分で考えずに、他の人間の話を信じるところがあるわよね。」

「はあ、・・・それで？」

「二酸化炭素、二酸化炭素って言うていれば、人間は、みんな信じて、排ガス規制だ。森林保護だ。と言ってるけど、もっと、宇宙的規模で何かが起こってるってことに、気づいてないのよ。」

「宇宙的？・・・それは、どういう・・・」

ハチさんが、小首を傾げた。

「いまの猫は、人間と一緒に、感覚が鈍ってきてるからねえ。」

「失礼な。人間と一緒にしないでもらいたいな。」

ハチさんが、毛を逆立てた。

「落ち着いて、聞いてちょうだい。」

ミミさんは、ハチさんを制して、続けた。

あたしは、もう、びっくりしどろしよ。

だって、あたしより知識ありそうだし。真面目なんだもん、みんな。

「あのね、地球温暖化現象が、二酸化炭素のせいだけだと、思う？
「・・・」

「確かに、そのせいもあるわよね。だけど、太陽熱や太陽風、磁場や地熱の変化、それにもなう、海流の変化があるわ。エルニーニョなんて昔からあるわよ。いまさら、騒ぎ立てても、どうかしてるわ。人間の排出する二酸化炭素は、多いけど。一つの要因にしかなってないと思うわ。」

「んっ。っほん。つまり、どういうことかな？」

「つまり、わたしたち動物には、どうしようもない要因があるってことよ。」

「俺たちには、何も出来ねえってことか？」

丸々と太った、アビシニアンが、尻尾を振りながら、ぶすつと言った。

おいおい、アビシニアンが太ったら、格好悪いよう。

「・・・出来ないわね。神様だけが知ってることよ。」

「また、神様か？」

どの猫か判らないが、後ろの方で声がした。
猫にも神様がいるのかな？

「何億万年も、いや、それ以前に、神に造られた宇宙は、存在してるのよ。わたしたちの寿命なんて、十五年か、せいぜい二十年でしょ。ちつぽけなものよ。地球だって小さいわ。その小さな地球に、小さな変化が起こっても、不思議じゃないし、当然よ。神様が、もういない。と思えば、いつでも潰せるわよ。わたしも、時々、知らずにありんこ潰しちゃうけど。そんなものなのよ。小さすぎて、二酸化炭素が、原因だ。と言っていれば、そうだそうだと、納得して、パニックにならなくて済むわよね。洗脳して、その方向に向けちゃうの。だって、しょうがないわ。人間が出来るのは、それぐらいだもの。」

「・・・」

「・・・」

静かになってしまった。

そりゃそうだ。

出来ないことは、出来ない。どうしていいか皆猫、判らないのだから。

もちろん！ あたしも判らないが、考えさせられてしまったよう。

だってさ、確かに、お偉いさんとか、学者が言ったことは、信じやすいものね。

隠された秘密を守るために、学者さん達が、利用されてるかもしれないでしょ。

「・・・あんっほん。ええ。・・・とにかくだな、ああ。その議論はまたにして、いま現実的な問題だな、ええっ！ 青年団の団長！」

「はい。」

クロが、首を持ち上げて返事した。

ええっ？ 青年団？・・・団長？・・・クロが？・・・若いのに？

あたしは、今、猫の世界に入ってるんだぞ。

集会だって不思議なのに、青年団の団長もありかよ？

「クロ君。何かあるかね？」

「はい。先日、一晩かけて見て回ったんですが、・・・」

帰ってこなかった夜のことで、きつと。

「斉藤さんちのところにある集積所が、ゴミの仕分けに手間取って、収集車が、長い間停まっているため、渋滞を起こしてます。」

そうそう。あそこって、いつも汚いんだ。

「そうなんだ。あそこの排ガスが、一番ひどい。あれをなんとかしなきゃ、この辺の二酸化炭素は、増えるばかりなんだ。」

ハチさんが、三步前に出てみんなの顔を見渡した。

「そうね。廻りの小さな事から始めましょう。」

ミミさんが、同調した。

「はい。そうですね。角を曲がった、小林さんのところも同じような状態です。どうも、その近所の、田中さんと市村さん、それに、日向さんところが、仕分けをしないで、ゴミを混ぜて袋に入れてるようなんです。」

クロが、説明した。

「んっほん。なるほど。それで、何か、対策は見つかったかね？」

「まだ、決まってはいいんですが、犬の青年団長と話をしまして、・・・」

ええっ？犬の青年団？・・・犬のお巡りさんなら、聞いたことあるけど？

ということとは、犬にも、人間の犬がいたりなんかしちゃって。あるある、絶対に。

「この地区の犬と猫で、協力して何とかしようということには、なったのですが。犬の会長さんが・・・」

犬の会長？ふむっ、いるよな当然。青年団長が、いるんだから。

あたしは、もう驚かないことに決めた。

婦人会も青少年育成の会も、絶対あるに違いない。あたしだって、

学級副委員長だ。

「んっほん。田中さんちのブルが、会長だったな。」

「ええ、無造作にゴミを出してる当家の、飼われ主が原因では・・・

」

飼われ主？そうだ、驚かないんだった、あたし。

「そっちが、何とかなれば、犬と猫の青年団で、超属派の、地球ゴミ化対策会議を開こうという事になりました。そこで、人間指導要綱を作り、ゴミをきちんと仕分けして出させて、渋滞を無くし、ひいては、二酸化炭素の削減にもなるかと・・・わずかではありませんが。」

「ふむっほん。ブル会長は、私のほうで何とかしよう。クロ君は、引き続き、犬の青年団と意見交換をするように。」

「はい。」

「それでは、時間も10時を過ぎましたので、終わりにします。次回、回覧泣きで、通知します。」

回覧泣き？時々、あちこちで猫の鳴き声がするのは、回覧板なのか？

「さあ、帰るか？」

「うんっ・・・」

「どうした、みく？」

「んっ・・・んっ、あたし考えさせられたわ。二酸化炭素。」

「そうか。」

「それにねえ、クロ・・・田島さんとのサブロウって人間なの？」

「ああ、でも、元人間って言った方がいいかな。」

「元？」

「うんっ。人間に戻るつもりはないみたいだよ。」

「げええっ！?!？」

ありかよ、そんなこと。

「全国では、結構いるよ。」

「全国？・・・日本全部ってこと？」

「ああ、去年の統計だと一万人以上だよ。行方不明の人間っているだろう？あれの半分は、人間が嫌で、猫や犬になってるよ。」

「……」

犬にもなれるんだ。行方不明の人って、今、猫やってるのか。

何だかすごいよね。

でも、その気持ちも判ると思わない。

「猫社会も、これでなかなか大変なんだぞ。」

「そう……みたいね。」

話しながら……いや、鳴きながらかな、歩いていて、家の庭に、いつの間にか着いてしまった。

あたしったらね。猫みたいにジャンプしたりしてるの。

あつ、猫やってるんだっけ、今。

「みく。お前も猫の素質があるから、どうだ、猫になっちゃったら。」

「

「しえーっ！！勘弁してくれよ。まだ、人間でやりたいこといっぱいあるんだからあ。時々だけでいいよ。猫になるのは。」

「そうか。……別に、毛を逆立てなくてもいいんだよ。」

「えっ？」

本当だ。背中毛が逆立ってる。

あした学校へ行くとき、髪の毛、逆立ってないだろうなあ。

「でもさあ。クロがないと猫になったり、人間に戻ったり出来ないんだろ？」

「いや、今度、ねこなりをあげるよ。」

「？……何だ。ねこなりって？」

「うん。ねこになれるから、ねこなり。」

「犬は、いぬなり。か？」

「犬が、なんて言ってるか知らないけど、犬にもあるよ。でも、選ばれた人間だけだ。」

「なるほど。」

「みく、誰かに話しても構わないよ。どうせ、誰も信じないから。」

そりゃそうだ。

（あたし猫になれるんだ）

なんて話した日にゃあ、病院送りになるかもしれないでしょ。

「まあ、きょうのところは、そういうことで・・・」

クロがそう言って、猫になってるあたしの鼻を舐めた。
戻った。

台所で、人間に戻った。

神様

＊神様

翌日、転校生がやってきた。

篠原里沙。

髪が長くて、色が白くて、足が細くて、二重まぶたで・・・はああ。美しさでは、完璧にあたしは負けた。

北海道から来たらしい。

「進藤、お前が今日一日、いろいろ教えてやってくれ。」
という、担任の後藤先生の一言で、雑用係の仕事があたしに回ってきた。

後藤先生は、体育の先生でサッカーの顧問をしている。

なかなかの良い男で、良い先生なんだよ。

良い先生つてのは、指導力がどうの、というのではなく、友達感覚で付き合える先生、という意味だよ。

まあ、良い先生の指示には、従わねばならないであろう。

朝から、里沙のお守り役だ。

だがこいつ、意外に好感の持てる女子生徒だった。

普通さあ、きれいなやつって生意気だったり、澄ましてたりするでしよ。

でも里沙は、そんなところがないみたい。

けっこう、おしゃべりするし、笑うときは、男子を気にせずに大口開けたりしちゃって。

この先、付き合っていけるかもね。

お昼休みになった。

雅美と涼子、それに里沙とあたしの四人で、中庭の芝生へ出た。

あたしは、お婆手作りのお弁当、里沙もね、お弁当。

自分で作ったんだってよ。

雅美と涼子は、きょうもコロッケパンと牛乳。

「わあっ、おいしそう。」

涼子が、里沙のお弁当を覗いて、言った。

「どれどれ。」

あたしも覗いた。

ミートボールが入ってる、それにサラダ。

アルミの仕切りの隣には、がんもどきの煮たのと、漬け物が入ってた。

ご飯の入ったパックを開けると、ふりかけの掛かったご飯が、少なめに詰められている。

あたしのお弁当はっつと・・・鶏の唐揚げだ。

それに、青梗菜とベーコンと玉子の、バター炒めが添えられている。ご飯の上には、梅干しと漬け物。

「あんたは、いつも美味しそうだね。」

と、雅美が、あたしのお弁当を覗きながら、里沙のミートボールを一つ摘んで、口に入れた。

「おっ、旨いじゃん。」

「へへへっ。あたし、料理好きなんだ。」

「好きでも、なかなか上手く作れないよ。」

「みく。みくも料理上手なんだから、今度二人で作って食べさせてよ。」

涼子の提案。

「んっ。暇があったらね。いいでしょ里沙？日曜日でもさ。ピクニック。」

「うんっ、いいわよ。でも、日曜日は教会へ行くから、夕方だったらOK。」

「教会？」

三人一緒に言っつて、里沙の顔を見てしまった。

「あたし、クリスチャンだもん。」

「へっっ、そう。家族みんなそうなの？」

雅美が、インタビュを開始した。

「一つ頂戴。」

涼子が、あたしの唐揚げを取った。

「あゝんつ、一番でかいやつだったのにい。」

「いただき。」

「んつ。それで？」

雅美の、インタビューは続行中。

それによると、家族構成は両親と、兄と姉が一人ずついて、クリスチャンは、里沙とお兄ちゃんの祐太郎だけだという。

お父さんは、筑波研究学園都市にある、農業環境技術研究所の、研究技師みたいだ。

北海道の農環研から転勤で来たんだって。

生まれは横浜で、東京・筑波・北海道、そしてまた、筑波に戻ってきたのだという。

「大変だな、引っ越しばかりで。」

「そうね。でも慣れたわ。はははっ。石岡には、小学校に入る前までいたのよ。」

「そうなの？」

「うんつ。お母さんの実家なの。そこからお父さんは、筑波まで通ってる。」

「部活は、やらないのか？」

「うん、・・・やりたいのはあるけど、どうせ夏休みまででしょ。あとは、お受験勉強。」

「それもそうだな。」

「ねえ、雅美は、何か信じてるの？」

「宗教ってこと？」

「んゝつ、宗教と言えば、宗教かな。」

「ないよ。」

「じゃ、神様は信じてないの？」

「んゝつと。・・・だって分かんないもん。いるかいないか。」

（そういえば、昨夜、クロと一緒に猫の集会に行ったとき、ミニさ

んだったかな。神様って言ってたよな。」

あたしは、雅美と里沙の会話を聞いていて思い出した。

（神様か？・・・本当にいるのかな？）

「いるわよ。」

あたしの頭の疑問に答えるかのように、里沙は、雅美に答えていた。

「見たのかよ？里沙は。」

「姿を見たり、声を聞いた訳じゃないわ。でも、後で気がつくのよ。あれは神様だったって。」

「何かに、化けてるのか？」

「神様は、何処にでもいる。何にでもなれる。風でも木でも、犬でも猫でも。」

（猫？）

「ふんっ。」

「今度、一緒に教会へ行こうよ。その後に、料理を作って食べる。」

「んんっ。暇があったらな。」

雅美は、いるかいにかわらないものに、興味がわいてきたようだ。

「ああ、美味しかった。」

涼子は、食べることに集中していたようだ。

あまり、人の話を聞いてないんだから、もうっ。

無事に、何事もなく六時間まで終わった。

里沙も、すぐに溶け込んで、あたしの出番はあまりなかった。

でもね、廊下を歩いてたりすると、男子がみんな振り返るんだよ。

きれいだからしょうがないけど、少しジェラシーっ、てとこかな。

授業中もね、普段うるさい奴が、里沙の眼を気にして、真面目になっちゃったりしてるから、おかしかったよ。

放課後は、陸上の中距離を見学してた。

雅美と仲良くなったからってわけじゃなくって、やっぱり、陸上やってみたい。

北海道マラソンの、20キロの部にも参加したんだってよ。

帰りは、里沙も途中まで一緒。

家は、国府町で国道沿いにあるんだって。

家に帰ったあたしは、クロに、ただいまを言った。

クロったら、テラスの椅子で丸くなって寝てるだけなんだから。

猫になった仲なのに、お帰りぐらい、言ってもいいと思わない？ ねえ。

まあ仕方ない、いまは、あたしは人間様だ。

「おかえりっ」

お婆が、クロの代わりに返事をした。

「宿題あるんだったら、やっちゃいな。」

「えっ、うん。今何時だろ？」

「まだ、6時前よ。」

「そうか、きょうは、少し早かったかな。誠は？」

「勉強してるよ。来週テストなんだって。」

「ふんっ。」

あたしは、二階に上がって、誠の部屋をノックした。

「おい、誠。テストなんだって？」

「ああ、みく姉。おかえり。そうなんだ、五教科だけだけどね。」
言いながら、ドアを開けて顔を覗かせた。

「今日の晩ご飯、なんだろう？」

「わかんないよ。あたし。いま、帰ったとこだもん。」

「そうかあ、なんだか腹減っちゃった。」

「お前は、いつも腹へってんの。」

誠のおでこをつついて、部屋に入った。

宿題は、あたしの嫌いな歴史。

鎌倉時代の出来事と年号だ。

あたしは、今、青春時代で、鎌倉時代もなまくら時代も、関係ない
つてえのよね、んっ当に！

はあ、仕方ない。やるかつ。

着替えたあたしは、机に向かったが、今ひとつ集中できない。

（神様か？）

里沙の言った神様と、猫のミニさんの言った神様と、同じなのかなあ、なんて考えてたりして。

いると思う？ 神様。

猫の集会？

★猫の集会？

家と学校で、平凡な日が続いて一週間が過ぎた。

あたしにとつては、平凡でもなかったけどね。

何しろ、猫になっちゃったんだから。二回も。

全然、平凡じゃないよね。驚き桃の木、山椒の木だよ。

まつ、とにかく人間としての、普段の生活はそのまま。

美味しいお婆の料理を食べて、学校へ行つて、時々やつてくる、疑問さんとお話をして、部活をして帰ってくる毎日。

あつ、そうそう里沙がね、陸上部の中長距離に入ったの。

夏休みの前の、短い期間だけど、やっぱり、身体も動かしたいって勉強も、まあまあかな。

歴史に関しては、あたしより出来るわね。

年号なんかもしっかり覚えてるし、教科書に載ってないことも結構知ってる。

お父さんが、好きみたいね、歴史。農業の研究者なのに。

あたしも、お爺が本やさんなんだから、少し、歴史関係の本でも、読めばいいのよね。

でも、年号がねえ。

その日、クロが100ml位の瓶を咥えて、あたしの部屋へやってきた。

「おう、クロ。・・・何だそれ？」

「ミャオニャリー」

「あつ、ねこなりか？」

「ミュンニャー」

「そうかそうか。」

（？変だな・・・鳴いてるクロの言葉が、わかるような気がする。）
ねこなりは、100ml位の、茶色の瓶に入ってる。

小さな瓶を付けた、ネックレスと一緒に、怪しい薬のようだ。
仕様書には、4〜5滴を、ネックレスの小さな瓶に入れて持ち歩くと書いてある。

匂いがかぐか、ちよつと舐めれば、猫になるらしい。

子供の手の届かないところに、保管。

摂氏35度以上の場所には、保管厳禁。

目的以外には、使用禁止。

お肌が荒れたり、かゆくなったら、使用をお止め下さい。

だって。何なんだよ。

何で、日本語で、細かく書いてあるのかは、深く、考えないことにした。

「ありがと、クロ！」

「フンニヤー、ギヤーフゴオ。」

「何?・・・集会か？」

「ニヤン！」

「何時？」

「ニヤイン？」

「ナイン?・・・9時か?OK!・・・台所で会おう。」

「ミヤ、ミヤーグロ。」

夜が、楽しみだ。

それにしても、年号を覚えるのは苦手だな、やっぱり。

語呂合わせで覚えるのは、歴史の大事な事柄を、馬鹿にしてるような気がしたりして、嫌だ・・・なんて言い訳したりして。

それよりも、晩ご飯何だろう。

「みく。居るのか？」

お爺だ。

「いるよお。」

ドアを開けると、お爺が、何冊かの本を持って入ってきた。

「この本、お前にあげるよ。」

「何の本？」

「うんつ。お前、いつも歴史が駄目だって言ってるからな。歴史の本だ。」

「えっ・歴史？」

「はははっ。歴史というか、時代物の小説だよ。」

「ああ、それなら好きだわ。」

山岡莊八の書いた伊達政宗シリーズだった。

「伊達政宗って、豊臣の前だっけ？」

「前じゃなくて、後かな？・・・まあ、おもしろいから読んでみな。」

「うんつ。ありがと。・・・あつ、お爺。晩ご飯何かな？」

「何だろな？・・・でも、コンスープの匂いはしたな。」

「コンスープ。じゃ、ハンバーグだな。」

「ははっ。たぶんな。」

お爺が下へ降りてから、宿題を片づけた。

予想通り、晩ご飯はハンバーグだった。

人参とブロッコリーの入った、煮込みハンバーグ。チーズが、とろ

ろり蕩けて、毛布のように被さっている。

サラダは、レタス多めのグリーンサラダ。

もちろん、漬け物有りだ。

この煮込みのソースは、何だか知らないけど、旨いんだよ。デミグラスのようなトマトのような。ハンバーグも柔らかい。

あのね、お婆はね、カレーと同じで、ハンバーグの料理も、いっぱいレパートリーを持っているんだ。

普通に、ドミグラで作るのから、フレッシュトマトソース、照り焼き、大根おろし、チーズ有り、ベーコン有り、きのこ有りとさまざまだ。

今日は、煮込み。

熱々が、じゅつとして、とろつとして、はぁあ、う・ま・い！
サラダのアスパラが、ハンバーグのソースで、飽和状態になった、
口の中を洗ってくれる。

晩ご飯と、学校が休みの時の食事は、本当に至極の時なんだな。

ありがたいね。料理の上手い、お婆と一緒に。

時間をきちんと守って、食事をするのも、美味しく食べる、秘訣かもしれないね。

だって、その時間になるとね、ちゃんと脳から、胃袋や舌に刺激が伝わるんだよ。

良くできてるよ、人間の身体は。お婆は、それを計算してるんだな、きつと。

お爺は、NHK七時のニュースの続きを、誠と一緒に見ている。

あたしは、お風呂に入った。

約束の9時になった。

早いよね、時間の過ぎるのって。

待ち合わせ通りに、台所へ来た。

もちろん、ねこなりは首に掛けてるよ。

「ミヤッ。」

クロが小首を傾げて、あたしを見た。

あたしは首に掛けた小瓶から、猫なりの匂いを少しかいだ。

なつちゃったよ、猫に。

ねこなり。すごいな。

ひよつとしたら、あすなるも、檜になれるのかもしれない。あすな

り、って言ってるね。

「みく。きょうは、犬の青年団長が来るよ。」

「はっ？犬の青年団長？・・・犬のおまわりさんってのは、聞いたことがあるんだけど・・・」

「おまわりさんじゃなくて、青年団長。この前のゴミの件で、意見を聞くんだ。まあ大体は、おいらと決めてあるんだけど・・・会長さんが、問題なんだよ。」

「犬の会長さん？」

「そう。田中さんのブルさん。」

空き地に行くと、この前より多くの人数・・・じゃない猫数が集まっ

ていた。

犬も、三匹いる。

「んっほん。会長のイノスケです。」
始まったぞ。

「先日の、ゴミの件で、犬の青年団長のタローさんにきてもらってます。不肖、私も犬の会長さんに話したのですが、なかなか・・・

」
「アウオーン！」

タローさんが、一声吠えた。

「では、タローさんお願いします。」

長い舌を出しながら、前に立った、じゃなくて前に座った。
前足を、きちんと揃えている。

「タローです。」

猫の言葉か？

「動物の言葉は、みんなわかるよ。それぞれに、訛りがあるけどね。」

クロが言った。

犬訛りに、鳥訛りか？おもしろいなあ。たぬき訛り、モモンガア訛り、あるある。

「先日ワン、クロさんと、地球ゴミ化対策会議を開き、話をしたワ
ン。」

ワンが、訛りかな。

「ですが、犬の団長さんがあまりいい返事をしないワン。」

「フギヤーゴ！」

ミミさんが、毛を少し逆立てた。

「人間や、わたしたちに出来ることだけでも、やらなければなら
ないのよ。神様だけに頼っちゃ駄目よ。何とかなるじゃなくって、何
とかしニヤきや！」

「ねえ、クロ。あのミミさんはクリスチャンだったたりして？」

「うんっ。神様を信じてるよ。」

「にやっぱり！」

「みく。お前は信じてないのか？神様。」

「えっ、・・・よく判らないな、神様って。」

「ふん。まあその話は、また後で。」

タローさんが、話を再開した。

「ミミさんの言うことは判りますワン。犬と猫の青年団でやることワン、ゴミの収集場所で、仕分けのされてないゴミ袋ヲン、破ってゴミをかつちらかして仕分けをする。あとは、人間がそれを改めて掃除をして、仕分けると言うわけですワン。」

やっぱり、ワンが訛りだ。そうに、違いない。

「それは、いいかもしれニヤいざますわね。」

イメルダさんが、右前足の毛を舐めながら、言った。

「デモ、ニヤンゲンニ オイカツケラレマッス。」

すげえ、イチローさん、日本語勉強してるわ。

「そう。問題は、人間ですワン。自分の後始末が出来ないのに、我々のすることは、ただ、ゴミをあさってるとしか思わないですからネン。」

ネン？ワンと違う訛りか？

「んっほん！で、どうします？」

「人間に、追いかけられる確率の高い朝ワン、犬がやりますワン、猫の皆様には、夜活動してもらいたいですワン。」

「フニヤーンっほん。どうですか？青年団長のクロさん。」

おっ、クロの出番だ。

「はい。猫の青年団は、それで結構ですが、・・・犬の団長さんが・・・」

「それについてワン、昨夜、犬の青年団を中心に、勇士を集めましたクーデターを起こすことに決めましたワン。」

「ニヤ！？」

「フニヤギヤー」

集会場が、ざわつきだした。

そりやそうだよな、クーデターだもんね。話がでかいぞ。

「んっほん。お静かに！・・・タローさん、クーデターとは穏やかではないですな。」

「はあ、会長のブルは、田中さんちの飼われ主ですワンが、以前から、生肉の賄賂を食わされてるといふ、噂がありましてワン、それで、他の犬を静かにさせたり、田中さんちの廻りにワン、近づけなかったり、うるさい犬にはかみついて、傷を負わせたりしてたわけですワン。」

「んっほん。ほう・・・それで、猫が近づいても吠えたわけだ。」

「そうですワン。ブルの側近ワン、四匹の副会長と会計なんですけど・・・」

「会計？もいるのか。学校の生徒会みたいだワン。いっけねえ。訛りがうつった。」

「・・・生肉の分け前に、あずかってますワンワン。いままでも、犬社会のために働いてないワンと、批判が上がっていました。そこで、会計のゴンを捕まえて、尋問したらワン、白状したのですワン。」

「昨夜の、キャインキャインというのはそれなのね。」

「ミミさんが言った。」

「そうですワン。我々勇士ワン、十二匹おりますワン。明日、五月十五日の夜十時に、集会をする予定ですワンが、そこで決起しますワン。」

「ウォンツ！フォーンツ！」

タローさんの側に付いていた二匹の犬が、かつこよく吠えた。

犬の五・一五事件だ。

「そのあとにワン、選挙で会長を決めて、ゴミの件を提案して了承してもらいますワン。」

「成功するきますか？」

今度は、左前足の毛を舐めながら、イメルダが言った。

「成功させますワン！準備ワン、万端ですワン。」

自信たっぷり、タローはきつぱりと、犬訛りで言った。

「明日の夜十時以降ワン、戒厳令を敷いて、我々の仲間が、この辺の警備につきますワンので、猫族の皆様はワン、外出を控えていただくよう、要請しますワン。」

「あたくし、あしたデートだったのよ。」

イメルダが、口を突き出して言った。

その側で、イチローが、ぽつと耳を赤く染めた。

「はあ、あの二人出来てるな。見なかった振りをして、肉球を舐めた。」

「夜中の十二時までにワン、カタをつけますワン。」

「かつこいいじゃん、タロー。」

「んっほん。どうですか猫さん？」

反対の声は、上がらない。

「では、そういうことで決定します。明後日の夜、再度集まってください。以上！」

「すごいね、クロ。」

「ああ、でも、犬族の世界ではよくあることだよ。」

「そうなの？」

「うんっ。タローさんも、神を信じてるから大丈夫だろう。」

「クリスチャン？」

「人間の世界では、クリスチャンと言うのかな。神様はいるよ。それを、信じてるだけだ。」

「クロ。お前も？」

「ああ。」

集会が終わって、話をしながら帰った。

「神は、一つだけだ。」

「一つ？・・・猫じゃないの？」

「神だよ。猫でも人でもない。それを造ったんだからもっと、偉大だな。」

「人は、偉大じゃないのかな？」

「何処が、偉大なんだ？」

「んっゝむむっ。そう言われると、返事が出来ないな。猫の集会の方が、人間よりしつかりしてるかも。」

「そりゃそうだ。生死が関わってるからな。人間は、欲得で動くかな。」

「ふゝん。でもブルだって・・・」

「うんっ。たまに、猫でも犬でも、人間に可愛がられすぎて、甘やかされるとそうなってしまうんだ。」

「甘えか？・・・」

「神を信じて、間違った道を歩かなければ、穏やかに死を迎えられるよ。」

「死・・・ねえ？」

「この世に産まれてきて、判ってることは、誰猫でも死ぬということだ。それは、人間でも、木でも草でも同じだ。」

「間違った生き方をすれば、死ぬときに苦しんで、死んでからも、ずっと苦しい。正しい生き方をすれば、死んだ後も生きているんだ。」

「はっ？どういうこっちゃ？」

「みくも、いろいろ学べば、判るはずだよ。」

猫の鈴のように、ぶら下がっている、ねこなりネックレスの匂いを、ちよっと嗅いで人間に戻った。

不思議な気持ちだ。

だって皆猫に皆犬、真面目なんだもん。考えさせられちゃうわよね、人間として。

神様っているのかな？

居るとしたら、どこで何をしてるの？

今度、猫になったとき、もっとクロに聞いてみよ。

もう、いつでもどこでも猫になれるんだ、あたし。

犬の五・一五事件

＊犬の五・一五事件

五月十五日の夜が来た。

「何だか騒々しいわね。」

お婆が、台所でお茶をすすっていた。

「そうね。」

あたしも、クロと一緒に、水を飲みに降りてきたのだが、お婆と一緒に、お茶を飲むことにした。

「フミヤー」

クロは、心配そうな顔をあたしに向けてから。自分の席について、水を舐め始まった。

「いつもは、こんなにうるさくないのに、どうしたのかしら。」

お婆は犬の吠える声が、気になるようだ。

「そうだね。この辺の犬は、いつもおとなしいよね。」

あたしは、話を合わせた。

だって、犬がクーデター起こしてるなんて、言えないでしょう。

「ウツー、ワン、ウワン！ウワン！！」

「家の庭まで、入ってきたみたいよ。」

「そうだね。」

あたしは。落ち着いた振りをして、渋茶をすすった。

「ウツ、ミヤー」

クロが、あたしの膝に乗って、鼻をこすりつけてきた。

心配なんだろうね。だってさ、クロが言い出したゴミの問題が、犬のクーデターになっちゃったんだから。

心配はもつともなことだ。うんつ。

「クロは、あんたに、よくなついてるねえ。」

お婆が、あたしとクロが、眼と眼で話をしているのを見ていった。

「・・・えっ？・・・そうだね。」

「何だか、兄弟みたい。」

（どきっ！）

「ええ〜っ、それってお婆、あたしが猫ってこと？」

「その反対よ。クロが、人間みたい。」

はあ〜っ。あたしったら、何ドキドキしてんだろっ。

「胸にぶら下げてるの、なあ〜に？」

（どきっ！どきどきっ！！）

「えっ？ ははは、こ、これ？ 友達に、もらっただわ。」

「ふ〜ん。中に何が入ってるの？」

お婆の手が、ねこなりのペンダントに伸びてきた。

「ただだ、だっ、だめよ。」

「へっ、どうして？」

「・・・こ、これはね、これは、他の人が触ると、効力がなくなっちゃうんだって。」

「何の？」

「え〜っつと、お守りなのよ。健康とか学問とか」

「まあ〜、みくは、そんなこと信じてるの？」

「いつ？・・・」

お婆は、迷信とかお守りとか、信じてないんだっけ。

「とっ、友達がくれたから、大事にしようかな、なんて思っちゃってたりして。へへへっ。」

「ワ、ワヲヲオオ〜ン！」

「あら、また、うるさくなっただわ。」

お婆は、立って窓から、外の様子を見た。

まいったなあ。あたしだって、お守りなんか、信じちゃいけないけど、言い訳は、むずかしい。

「また、庭に入ってきて、追いかっけっこしてるわ。」

クーデター、失敗かな。たしか、五・一・五事件は、失敗だったよな。田中さんちのブルは、強そうだしな。成功すればいいけど、タローだって、実権を握ればどうなるか判らないしな。

（クーデターか・・・）

「えっ？何か言った・・・クーデ・・・？」

「えっ、あっ、いや、そのクー・・・クー・・・食う、食うべきか食わざるべきか？」

「はっ？」

「少し、お腹すいたな。なんてね・・・」

「・・・きょう、少しおかしいわね、みく。」

「へっ？・・・れ、歴史が少し・・・難しくってね。」

「ふん。来年は受験だしね。そのお守り、効き目があればいいけどね。」

ふん、冷や汗たらりんたらりん。

「何だか、うるせえな。」

誠が、下りてきた。

「勉強してたのに、集中できないよ。何かあったのかな？」

（クーデターよ。）

「ミューニャニャーニャン」

「エッ？何だつてクロ？」

「ほほほ。誠ったら、クロの言ってることが判るの？」

お婆が、笑って言った。

「いや、判ればいいけどね。なあ、お姉。」

「そうだね。」

クーデターって言ったのよ。

「フミヤ。」

「なあゝに。水が飲みたいの？」

あたし、人間のままなのに、猫の言葉がわかるようになってきた。

「ミヨ、ミヤミヤーン。」

ふん。誠が、落ち着きを取り戻したようだ。

「誠。クロ、水飲みたいみたい。」

「オーケー！ねえ、お姉。あした、理科の植物のどこ教えて。」

「ああ、いいよ。」

クロに水をあげてから、誠は、また二階へ上がっていった。

「台所、きれいにしておいてね。」

お婆も、自分の部屋へ戻った。

お爺は、疲れたのか、七時のニュースを見た後、鼾をかいて寝ている。

「ワッ！ワウオ～ンンッ～！」

「終わったニヤン。」

クロが、首を上げて言った。

やっぱり、猫の言葉がわかる。

「そうか。つで、どうなったの？」

「タローさん達が、成功したみたいだ。」

「うんっ。」

「今夜は、まだ、警戒してるから、あしたの夜九時に会議を開いて、そのあと報告するってさ。いま、庭でタローさんが言ってた。」

確かに、誰犬か知らないが、庭で吠えてた。

クーデター成功

★クーデター成功

翌々日の夜十時、猫になったあたしとクロは、いつもの場所で、猫の会議に参加した。

犬のタローが、数匹の犬と一緒に参加していた。タローは、鼻の頭に傷を作っていた。他の犬も。耳が裂けていたり、びっこを、引いていたりしている。

「すっげえ〜なあ〜。」

「結構、時間掛かったみたいだね。」

クロったら、案外、平然としてるんだよ。おとこの夜は、時々、びくっとしてうるさかったのにね。

あたしだって、怖かったもの。

だってさ、歯が鋭いもん。

「怖かったよな。クロ。」

「うんっ。・・・だけど、人間の方が、もっと怖いよ。」

「えっ？」

「あつ。そうか。みく、お前人間だっけ？」

「へっ？ そうだよ。お前のご主人様でしょ。」

「でも、ネコの方が、似合ってるよ。」

「んっほんっ。では、早速タローさんに報告を。」

タローが、皆猫の前に出てきた。

「クーデターは、成功しました。」

格好いい。言うことも簡潔。

「それで、後は、どうなるぞますの？」

「ブルは、引退ですワン。新しい会長さんには、路川さんちの、トシゾウさん。会計には、佐藤さんちのミチコさんが成りますワン。わたしも、青年団長を降りて、ここにいて、サブローが後を引き継ぎます。」

「えっ？タローも辞めるの？」

「あなたは、今回のヒーローぎますから、留まるべきぎますわよ。」

「フミヤ」

「ニョゴ」

「ニャンミヤン」

皆猫、あたしと同じ考えだ。

「わたしワン・・・」

タローが、話し出した。

「・・・クーデターを成功させましたワン。だから、一線からしりぞきます。私欲でやったわけでワンなく、犬猫属のために、鳥や人間のためにやったわけで、あとは、長老犬に任せます。わたしは、青年団のほうも引退して、サブローに譲りますワン。わたしが、中央に残ると、余計な誤解を招くことにも成りますワン。それに、いろいろ勉強したいこともあって・・・」

格好いいなあ。本当に。タローは、犬や猫、それに人間の違いについて、調べたいんだって。

青年団も、六ヶ月から一年以内の犬が団員なんだってさ。

「クロ。お前は、猫の青年団長だろ？まだ、子供だと思ってたけど・・・」

「猫は、最初の一年で、大人になってしまつよ。犬もそうだよ。猫生は短い。」

「何だ？猫生って。」

「人間は、人生だろ？猫は猫生。犬は犬生だ。」

「なるほど。牛は、牛生。魚は、魚生か。」

「うんつ。そうなるかな。人間だけだよ。いつまでも、おっぱい飲んで、親にべたべたしてるのは。」

「うっくん。考えちゃうな。」

「はい。んっほん！では、青年団長のクロ君。」

「おいっ。お前だよ。クロ。会長が呼んでる。」

「わかった。」

クロが、今後の方針を、皆猫の前で説明し始まった。

立派なもんだ。考えちゃうよね。

だってさ、あたしったら、お爺やお婆に甘えてばかりだもん。もう、十五年も人間やってるのにな。

クロは、まだ、一年未満だよ。

猫の寿命が20年で、人間の寿命が百年だとしたら・・・でも、クロは、まだ五歳ぐらいだ。

はあ。何て情けないんだ。あたしは。

「・・・ということで、協力していきたいと思います。」

はっ。クロのスピーチが終わった。大事なことを聞いてなかったみたい、あたし。

「では、きょうの集会は、これで終わります。」

「フミヤ。」

「ワフオーン。」

集会の終わった後、猫と犬の青年団で、地球ゴミ化対策会議があった。

あたしも、ちょっと、邪魔した。一人で帰るの怖いもん。

クロと犬のタローが、考えてたことを実行するらしい。新しい犬の青年団長サブローもやる気まんまん。

仕分けをしてない、ゴミの袋だけを選んで、破って仕分けをするんだってよ。斉藤さんちのこの集積所と。他二箇所。

夜は、猫属。朝は、犬属。最後の仕上げは、人属。考えてるよね。

猫と犬が、仕分けされずに出された、ゴミの袋を破って、ビニールやら生ゴミやらに、散らかすんだってさ。

その後に、清掃車でやって来たヒト科・ヒト属・ヒトが、仕分けして片づけるのだ。

元もと、ヒトが出したゴミだからしょうがないけどね。

たぶん、ヒトは怒るよね。（猫や犬が散らかした。）と言ってね。この集会に、ヒトの代表も来ればいいのよ。

そうすれば、猫や犬の考えが解るわよね。ヒトよりも偉いって。

絶対、猫たちの方が偉いわよ。

あたしも、その偉い猫の一人・・・じゃない、一猫なんだから。

そう。あたし猫なのよ。なんか、猫になってヒトを見る眼が変わったわ。

ク口と家まで帰る途中は、少し憂鬱な気分だった。

人間とは（パート？）

*人間とは（パート1）

あまり眠れぬ夜を過ごした翌日は、頭が重い。

「早くしなさい。」

お婆の声が、耳から入って、睡眠を司る脳神経を揺さぶる。

「はい。」

「お姉。なんだか眠そうだね。」

「んっ。なんだかじゃなくて、とても。」

「顔洗ったのか？・・目やにがついてるよ。右の眼。」

「えっ？・・やだっ、もう。・・も一回、顔洗うか。先行ってて。」

顔の洗い直しで、少し、脳細胞がむくむくと起き出したようだ。

「おはよう。」

「さあ、食べなさい。」

食卓の上に目をやると、脳細胞の八割が目を覚ましたみたい。

納豆がある。アスパラガスのおひたしがある。さんまの柔らかな味
酴干しがある。

そして、きゅうりと大根のぬか漬けに、わかめのみそ汁が、並んで
るんだよ。

そりゃあ、目が覚めるわな。食べる事が好きで良かったな、あ・た・
し。

でも、何でだろうね。お婆は、あたし達の好きなもの知ってるんだ
ろう。

だってさ、朝でも夜でも、ほとんど、残したことがないんだよ。分
量も、ちゃんと判ってるんだから、すごいよね。

残飯の出ない家庭って、あたしん家ぐらいじゃないの。ねえ。

誠は、納豆に玉子の黄身を混ぜ込んで、ご飯の上にかけている。

あたしは、納豆には、多めの刻み葱と、多めのからしを入れて、こ

れ以上、糸は引かないぞというまで、おはしで、かき混ぜすぎるくらいかき混ぜて、ほっかほっかのご飯にかけて食べるのが好きなんだ。

ご飯は、絶対にほっかほっかでなきゃダメ！納豆と一緒に口入れると、ご飯が舌に触れて、やけどしそうなぐらいがいい。それが、また納豆の味を引き立てちゃうのだ。

その熱々ご飯が、お婆の手からあたしの手にバトンされた。納豆は、すでに糸の中にうずくまって、準備万端だ。

「あはははっ。旨い！」

「なんです。女の子が、旨いだなんて。」

「だって、これはさ、美味しいじゃなくって、旨いでしょ。」

「同じじゃないの？」

誠が、納豆のねばねばを、みそ汁で洗うようにしながら囁いて言った。

「ちがうっ！絶対にちがう。」

「えっ。どう、違うんだよ？」

「・・・それはだな、・・・納豆は、旨い。・・・カレーは、美味しい。ということだな。」

「何だ、それ？・・・じゃっ、オムレツは？」

「美味しい。」

「ラーメンは？」

「旨い。」

「おそばは？」

「美味しい。」

「うどんは？」

「旨い。」

「焼きそば。」

「旨い。」

「スパゲティ。」

「旨い。」

「お刺身。」

「美味しい。」

「・・・？　なんか、判ってきたような気がする。」

「だろう？　そうこなくっちゃ、あたしの弟なんだから。」

「漬け物は、旨いで、おひたしは、美味しいだろ？」

「んむふむつ、いいところをついてるな。」

「馬鹿なこと言っていないで、食べちゃいなさい。遅れるわよ。」

お婆は、この手の話は、苦手らしい。

「はい。」

朝、顔を二回洗ったせいかな。家が出るのが少し遅くなった。

「遅いぞ、みく！」

雅美に、肩をこづかれてしまった。涼子と里沙もいる。

「ごめん。ごめん。皆様おそろいで。」

「何が、おそろいだよ。遅刻したら、あんたのせい」

顔を二回洗って、誠と美味しいか旨いかの討論会を開いてた。とい

うのは言い訳にならないだろうな。

「きょう、ホームルームがあるよね。」

里沙が言った。

「あつ！　忘れてた・・・」

あたしが進行司会役だった。

「議題は、ルールよね。」

里沙が追い打ちを掛けてきた。

「・・・そうだったね。」

いつもは、隆太が進行するのだが、隆太はきょう提案事項を発表することになっている。提案事項と言っても、学校側にとっての良い生徒の隆太のことだ。生徒側にとって良い提案事項になるかどうか、判らない。

前にもあったんだよ。そうゆうことが。

その時は、清掃のことだったんだ。

隆太の提案というのは、学校の廻り、つまりフェンスで囲まれた外

側。そこまで清掃しようというものだった。

（おおつ、なんとボランティア精神の豊かなこと。）

あたしは、そう思った。もちろん、ひ・に・く・！・！

（学校の受け狙ってるだけじゃん！）

雅美の顔は、そう言っていた。

（時間が足りないよ。帰るのが遅くなる。）

涼子の顔は、確かにそう言っていた。

結局、ボツになったけどね。

当たり前だわな。人数とか時間とか範囲とか、何も考えてねえもん。ホウキの数だって、足りやあしねえ。

そうゆう人って、居ない？

けっこういるよね。受けねらい。

「ルールって、規則でしょ？ 規則増やして欲しくないわあ。」

涼子が言った。

「でも、人間社会には規則は必要よね。学校にだって。」

里沙が、優等生的言葉を述べた。

「縛られるのは、やだよな。」

「違反したら、どうするの？」

雅美と涼子は、ぶつぶつと小言を並べている。

（ああ、憂鬱！）

だって、進行係は、中立公平でなければならんだ。あたしにだって、意見はあるし文句も言いたい。嫌いだ。進行役。それにしても、なんで人間ってめんどくさいんだろ。

人間とは（パート？）

* 人間とは（パート？）

とうとうホームルームの時間がやってきてしまった。

時間割の変更がないかなと思いつながら過ごした一日は長かった。

そうゆう時ってあるでしょ。

絶対にやってきてほしくないけど、絶対にやってくるのがわかってるとき。

やだよ。

そればかり考えて、過ごす時間がもつたないよ。考えたくなくとも、いやな事って頭に絶対に引かかっているもんね。

やらなければならないことも、それを超えなければならないことも、わかっているんだけど・・・あゝあつ・・・憂鬱。

今日一日、あたしはなんて無駄な時間を、過ごしてしまったんだろう。

ホームルームなんて、大した事ないだろ。さっさと片付けちまいな。あたしは自分に言い聞かせて、教壇に立った。

担任の後藤先生は、窓際に椅子を持っていつて、かすかに微笑を浮かべながら教室中を眺め回している。

「それでは、ホームルールを始めます。」

あたしは椅子に座り、クラスメイトの顔を見回して一呼吸おいてから言った。

「今日の議題は、ルールです。意見のある人、提案のある人は挙手を願います。」

あたしの右隣には委員長の高太。左には書記の直子が黒縁のめがねを鼻にかけて、緊張して鉛筆を握っている。

直子は、人前に出ると注目されていなくても、緊張するタイプなのだ。でも、書記としての能力は、ピカイチ。誰もが認める才能を持っている。

授業中のノートなんてすごいよ。他の人の倍は書いてるね。

それもきれいにまとめて。ノートを執りに学校へ来てるみたい。

テストの前なんか、直子の前に行列が出来てノートを借りるんだ。その責任感みたいなものもあるのかもしれないな。

だって本人の成績は、クラスの中ぐらいいだもん。

性格は、真面目とゆうか、優柔不断の堅物ってとこかな。

「はい！」

ほらきたっ。

いつも、必ずといっていいほど、真つ先に手を上げる真治だ。

川崎真治。成績も運動能力もまずまず。だが、常に反抗精神が表に現れている。

決して暴力的ではないが、頭も悪くないだけに弁が立つ。ときどき、論旨に矛盾があることに気づかないけどね。

「川崎君。」

「あゝ。ルールって規則でしょ。生徒手帳にこまごまと書いてあるやつ。あれさ、全部読んだことあるやついるのかな。・・・おれは、呼んでねえけど・・・」

「だから、学生服のボタンはずしてるのか・・・」

仁科が、ちよっかいを出した。

「・・・つるせいよ！あれを読んで、守ればいいだけだろ。変なのがあれば、全校生徒会にかければいい。」

「お前、呼んで守れんのかよ？」

また、仁科がちよっかいを出した。」

「だから、守れねえような規則は、生徒会で検討するんだよ。」

「規則は、破るためにある。」

誰かが言った。

後藤先生は、ニタニタと笑っている。

「発言は、手を挙げてからにしてください。」

あたしは、一応注意をした。

「いまの、川崎君の意見に対して何かありますか？」

「はいっ」

ほらきたっ。

鈴木亜紀。いわゆるつつぱり。成績は上。真剣に授業を聞いてるとは思えないんだけど（あたしもだけど、へへっ）、学年で十位にはいつも顔を出している。

姉御肌で、学校側に対して反抗的な言動をする。

もちろん、学校側にべたつく生徒も大っ嫌いだ。なぜか、あたしとは気が合う。

「鈴木さん。」

「川崎君の意見は、もつともだわ。・・あたしも読んでいないし、学ランのボタンをはずしては駄目だとか、スカートの丈を長くしたり、短くしたりとか書いてないじゃん。・・先生！・・先生は読んでますか？」

「んっ？ 俺か・・目を通した程度で、読んだとは言えないな。」足を組んだまま、後藤先生は言った。

これが、この先生のいいところだ。嘘はつかない。いい先生になるうとはしない。

「先生が、これだもんしょうがねえよ。」

ちよっかいの仁科が、口を出した。

「先生は呼んでなくてもいいんだよ・・。」

亜紀が続けた。

「・・・だつて、生徒じゃないんだから。ただ、生徒を監督する立場として、内容ぐらいいは、知っておいてほしいなと思って、あたしは質問したんだ。誰も改めて読もうとしないのは、常識的なことしか書いてないからだろう。川崎の言うこと、わかるよあたし。生徒の立場と現実を見計らつて、検討すべきかもしれない。」

そうかもしれないと思った。

「他に何か？」

教室を眺め回すと、机に落書きをしてるやつ、勝手なおしゃべりをしてるやつ、何の参考書か知らないが、読んでるやつ。半分以上は、

聞いてねえ！

あたしは、なんと言ってもこれが嫌いなのだ。

リーダーシップがないと言えば、それまでだが、あたしだって、意見や文句のひとつも言いたいのを我慢してだな、まとめようとしてるのに。むかつく。

「平さん！参考書なんか読んでないで、生徒手帳でも読んだら！」

「相川君！エロ話もいいかげんにして、規則の話に耳を傾けたらどう！」

えっ？ちよつとやだ・・・あたし、本当に頭にきてるみたい。

みんなが、あたしを見ている。後藤先生まで。

「んっほん・委員長。お願いします。」

隆太のやつ、まだポカンと口をあけてあたしを見てる。

そうだろうな。今まで、あたし切れたことあんまりないもんな。

猫の集会で、猫や犬の真面目さに感化されたかも。

右ひじで突いてやると、隆太は立ち上がった、

「えっ、え〜と・・・川崎君や鈴木さんの意見は、もっともだと思います。そこで、ひとつ提案があるのですが・・・」

そこまで言って、隆太は右から左へみんなの顔を見渡した。

さっきのあたしの怒りがまだ尾を引いているのか、みんな隆太を見ている。

いや、半分はあたしを見てるかな。

「提案というのは、生徒手帳にある規則にのっとって、毎朝、検査をするのはどうでしょう。」

「なんだよ、それ！」

「プライバシーの侵害だよ。」

「誰がやるんだよ。」

「ふざけんな！」

「馬鹿か、お前は？」

「時間の無駄遣い！」

騒然！！

先生は、知ってて知らんふり。

「静かに!!」

あたしは、立ち上がって大きな声を出した。

さっきのが効いているのか、すぐに静かになった。

あたしは、委員長に向かっていった。

「委員長。いまみんなからプライベートの侵害、時間の無駄遣い、誰がやる、何を検査する、何のためにという声が上がっていました。が、提案するからには、それなりの理由や実施するための方針、いつから実施するのか、クラスだけか学校全体か、リスクやメリットも考えていると思いますので、お答えください。」

一同拍手。

隆太は、あたしの顔を怖いものでも見るように、大きく目を見開いて見ている。

「答えるよ!」

仁科の声に、立ち上がった隆太は、しどろもどろだった。

当たり前だ。大して考えてないんだから。ただ、こうゆう提案をすれば、先生に受けがいいかな程度にしか考えてない。

隆太は、素直でいいやつなんだけど、ときどきむかつくんだよなあ。みんなの質問にも、規則は守らなければいけないとか、学校は勉強するためにあり、公共の場でプライベートの侵害にはならないとか、お互いが規則を守ればよりよい学校生活が出来るなどなど、よく出来ました的発言をした。

みんな、うざったい顔して聞いていた。

「先生。」

あたしは、先生に尋ねた。

「この生徒手帳の規則は、いつ作られたのですか?」

「んっ?・・・戦後の教育法改正のときに作られて、何度かの改正があり、最後の改正は、確か昭和52年じゃなかったかな・・・生徒手帳に書いてあるぞ。」

「つまり、20年も前の改正ということですね。」

「そつなるな。」

「委員長。提案を続けてください。」

後藤先生は、ニヤツと笑った。

それを見て、亜紀が声を出さずに笑った。

あたしは、イラつく心を抑えるのに必死だった。

だって、そうでしょう。

クロだって、犬のタローだって、ちゃんと下調べして賛同者やその他の意見をきいてから、提案したり行動したりしてるのよ。しっかりとした考えあつてのことなのよ。

（あゝ、なんて人間は馬鹿なんだろう。）

「どうした？委員長。・・・なんか言えよ。」

「・・・・・・。」

隆太は、立つたまま言葉が出てこない。

あたしの顔を見たってしょうがないでしょうに。一度、猫の集会に連れて行ってやりたいわ。んっ当に。

「委員長の言いたいことは、こうゆうことだと思います。」

あたしは、立ち上がった。続けた。

「規則とは何かということです。生徒手帳に書いてあっても、しみじみ読んだことのある人は、いないと思います。あたしも読んだことがないし、学校側からも読みなさいという指導は、なかったと思います。・・・じゃ、なぜ生徒手帳に、規則が書いてあるのか？それも、20年も前のやつが。社会には、たくさんの規則があります。法律もそのひとつですし、免許を取るのにも、交通規則を学ばなければなりません。いや、自然の中にも、動物社会にも、理科で習ったように、法則や規則があります。それは、人間と違ってきちんと守られています。守られない動物は、死ぬしかないでしょう。生きていくうえで、正しい規則だからです。自然が作った、規則だからです。あたしたちの規則は、人間が作ったものです。正しいものもあれば、誰が考えても、おかしいものもあります。自然の上に成り立った規則じゃないから。でも、人間として守らねばならない規則

も、当然あるでしょう。その上で、中学生としても・・・委員長は、今の規則を守りながら、改めて規則を見直してみようと、言いたいのだと思います。明らかにおかしい規則は改善し、付け加えてもいい規則は、付け加える。学校側やPTAに、お願いする規則も出てくるかもしれませんよね。人間として、決して不公平ではない規則。中学生として、当たり前前の規則を考えてみませんか？」

ちよつとの間、教室が静かになった。

窓から心地よい風が吹いて、あたしの心を大きくした。

隆太が、あたしの顔を見て拍手をしている。

「そういうことなのか？委員長！」

仁科が、隆太に質問。

「・・・そつ、そういうことです。はいっ！」

「だったら、最初からそう言えよ！」

「そつだよ、規則を守って検査するなんて言えば反発するのは、当たり前だろうが。」

「未来に、助けてもらってんじゃねえよ。」

「はははっ。まあまあ。先生もな、正直言つて、この規則が妥当かどうかわからない。学校側としても、特に厳格に守らせてるわけでもない。しかし、親の中には厳しいことを言う人もいるし、周りの人たちの中にも、中学生の癖にとか言う人もいる。俺は、正直言つてそんな言葉を聴くと、おもしろくない。大人が規則を守ってから文句を言え。と言いたくなる・・・」

「そつだそつだ。」

「その通りだ。」

「・・・実際は、言えないけどな。先生も立場があるからな。どうだ？まだ35分の時間がある。生徒手帳の規則にこだわらずに、みんなで考えてみるのもいいんじゃないか？」

後藤先生は、あたしのほうへ顔を振った。

あたしは言った。

「35分しかありません。その時間で話し合える議題でもないと思

いますが、次のホームルームへ引き継いでも、価値はあると思います。時間を節約する意味でも、5人ずつのグループに分かれて、25分間話し合ってください。その後、各グループに発表してもらいます。」

あたしと委員長、書記もそれぞれのグループに入って、討論を始めた。

思っていたよりも、みんな真剣な顔をしている。

少しは、猫らしくなったみたいだ。

後藤先生は、ふっと笑って、校庭に顔を向けて一年生のサッカーの授業を見ている。

人間って、大人も子供もどうしようもない動物なのかもしれない。

人間とは（パート？）

*人間とは（パート？）

ホームルームが終わって、下校の時間になった。

あたしは、何かが心にひっかったまま、帰り支度をした。きょうは、部活はない。ソフトボール部だけが、夏の予選が近いので特訓をしていた。

「きょうの未来、なんか迫力あったわね。」

雅美が、割と静かに言った。

「んっ。久しぶりに真剣だったみたい。」

涼子も同調する。

「・・・なにかね、真剣になっちゃったわ。あたし。」

「神様の仕業かもね。」里沙が、微笑んだ。

「神様？」

あたしたち三人は、立ち止まって里沙の顔を見た。

一歩先んじた里沙が、振り返って

「そうよ。神様がみんなに考えさせたくって、未来に言わせたのよ。」

「

と、さわやかな笑顔を見せた。

「神様ってキリスト？」

涼子が聞いた。

「キリストは神様の子供よ。」

「あたしん家にもよく来るよ。なんか小さな雑誌を持ってるさ。結構

しつこいのもいたりして。」

雅美が言った。

「宗教のひとつだね。」

あたしは、誰に言うともなく言った。

「宗教といえば宗教ね。でも、あたしは宗教だとかには、こだわってないの。だって、神様は、一人だもの。」

クロと同じようなことを言っている。

「一人ということは、人間なのか？」

「神様よ。一人という言葉を使ったけど、唯一の存在ってこと。」

「ゆ・い・い・つ？」

「そうよ。ゆいいつ！」

「あたしだつて、あたしだけよ。」

あたしは、言った。

「そうなのよ。未来は未来だけ。あなただけなの。他のものにはなれないわ。」

（・・・あたし、時々ネコになっちゃう・・・）

「だから、大事にしなきゃいけないのよ。」

「なにを大事にするんだ？」

雅美が、口を尖らせながら言った。

「自分をよ。」

「・・・じゃ、神様は関係ないじゃん。」

「神様に近づくの。神は完全だから、あたしたちも見習って完全に近くなればいいのよ。人間には、とてもむずかしいけど、心に留めて生きていくことは出来るわ。」

（たしかに・・・人間にはむずかしい。ネコやイヌの方が真剣だ。）

「それって、理想を追いかけてるのと違う？」

涼子が、つぶやくように言った。

「理想かもしれない。・・・でも、理想を求めるのは悪いことじゃないわ。」

「おいっ！未来。」

歩道橋の階段に座っていた、女子中学生が声をかけてきた。

「なんだっ。亜紀じゃないか・・・どうしたの？」

「ああ。今日のホームルームが気になってな。ちよっと、お前と話がしたくって。」

「うんっ。いいよ。」

「別に、どうってことじゃないけど・・・規則なんてあってないよ

うなもんだし・・・そりゃ、なけりゃ困ることも多いわけだけど・・・
・なんか、来年受験だと思つと憂鬱になつてな。受験の制度だつて規則といえるだろ。」

「そうだね・・・考えてみれば、規則だらけかもしれないな。」

亜紀は、ツツパリだけど、見る目は確かなものを持つてゐるんだ。

回りがツツパリと思つてゐるだけで、本人はそう思つていないし、どこか不思議な魅力が、あつたりするんだ。

「亜紀ちゃん。」

涼子が、歩道橋を上りながら亜紀を見た。

「何だ？」

「あんた、神様信じる？」

「神様？・・・んっ。いるかもしれないなあ・・・いや、いたほうがいいな。お化けは、いねえだろうけど、神様は、いてもいい。いると信じれば、いいんだな・・・きつと。」

「宗教を信じるのは、弱い人間だろ？」

雅美が、また口を尖らせて言つた。

「そうか？・・・何が弱いんだ？体か？頭か？」

雅美と亜紀は、あまり仲がよくない。

「なにか欠点というか、心に傷を持つてるといふか・・・」

「そんなものはア、誰でも持つてゐる！・・・お前だけが持つてないのか？他の人間を弱いと言えるのか？決め付けることも出来ないし、決め付けられることも出来ない。弱いといえればみんな弱いし、強いといえればみんな強いとも言えるんじゃないかねえのか？」

「そりゃ、そうだけど・・・」

雅美の口が、さらに尖つた。

「人間だけだろ？そうやって自分のことはどうでも、他のやつを事を気にするのは・・・」

（そうだ。ネコはもつと賢いぞ。ネコ科ネコ属のことを考えてる。）

「あたし、おなかすいた・・・」

涼子の足取りが重くなつた。

「そういえば、そうだな。」

雅美が、同調した。口の尖がりには、すこし納まったようだ。

「未来っ。今度の土曜日遊びに行っていていいか？」

亜紀が、あたしの顔を見て言った。

「あたしも・・・」

「ああ、あたしも・・・」

結局、四人とも来ることになった。

亜紀の言ってる事は、間違っていないと思う。

自分のことしか、考えてないやつ多いもんね。大人も子供も。ヒト科ヒト属ヒトは厄介な動物だ。人間って何なんだろう。

あたしも、おなかすいた。

お婆は、今夜何を作るんだろ。楽しみで、口の中をよだれ達のはしやぎ始まった。

家族

＊家族

「腹減った〜！」

「何です？腹減ったなんて・・・おなかがすいたでしょ。」

「だって、おなかがすいたじゃ、ピンとこないんだよね。」

誠が、台所に入ってきてお婆に叱られた。

「はははっ。誠の言うことすっごくわかる。」

「なんです未来まで。」

「へへへっ。だって、おなかがすいただと、おやつを食べる感覚で、ごはんをたくさん食べる感覚じゃないもん。」

「そうそう。未来姉の言うとおり！」

「英語だと、アイム、ハングリーで終わっちゃうのに、日本語は、難しいわ。」

「はいはいっ。・・・さあ、そこ片付けてご飯にしましょう。」

「待ってました。」

誠は、忙しくテーブルの上を片付けて、お箸やお茶碗を並べ始めた。クロは、もう食べたらしく、テーブルの下で丸くなってウインクを送ってきた。

（あとで、ネコになろうぜ。）

といってるみたい。

あたしもウインク返しをした。

お爺が、帰ってきた。

時間がかえってくるのか、においで帰ってくるのかわからないけど、きつと、時間が体にしみ込んでいるんだろうな。

六十年以上、何時間心臓を動かしているんだろう？ 驚異的不思議だ。

「・・・んっ？ 何か顔についてるか？」

「えっ？ いやべつに・・・」

お爺に、驚異的不思議の観察を見られてしまった。

「はい、どうぞっ!」

お婆が、独特の微笑みとともに、メインディッシュをお爺の前に置いた。

お爺の口元が、ちょっとだらしくゆるんだのを、あたしは見逃さなかった。

「おおっ、肉団子だ。」

「違うよ、お爺。ミートボールだよ。」

「へっ。英語と日本語の違いだけじゃないか・・・」

「違うよ。肉団子は中華とかあんかけとか、それに揚げ肉団子。肉団子入り野菜炒めもあるな。」

「・・・?じゃ、これは何だ。」

「えっ。・・・これは、ミートボールシチュー?・・・デミグラスミートボール?・・・煮込みミートボールだ。」

「煮込みとミートボールじゃ、英語と日本語が混ぜこぜだな。」

「いいんだよ、それで。一緒に入れて煮込んだから、混ぜっちゃったんだ。」

「はははっ、そうか。・・・まあ、旨けりやなんでもいいがな。」

「それも違う、お爺。これは、旨いじゃなくて美味しいだ。」

「一口、ご飯を口に入れてから、あたしは、お爺に言った。」

「ほう、旨いと美味しいとは、違うのか?」

「うん、違う。これは、美味しい。」

（ふんっ）と鼻で返事をしてから、お爺はミートボールをひとつ箸で持ち上げて、口に入れた。

「んっ。・・・美味しいな。・・・そうか、しょうゆ系が旨いで、

ソース系が美味しいかな?・・・」

「はははっ、いい線言ってるよ、お爺。」

誠が、合わせた。

「そうかつ。チーズが美味しいで、豆腐は旨い。サラダが美味しいで、漬物は、旨い。」

・・・あれっ？カタカナとひらがなか？　クッキーは美味しいで、かりんとうは、旨いかな・・・」

「ははっ。お爺、わかってるじゃん。でも、かりんとうなんて、いま売ってないでしょ。」

「そうか、あまり見かけないな。それじゃ、甘納豆に直しておいてくれ。」

「おじいさんまで、馬鹿なこと言っていないで、・・・早く食べちゃいなさい。」

お爺は、肩をすくめてあたしとまことを見た。

お爺のセンスは、どっちかって言うとお爺とあたしと誠に似ている。いや、あたしたちが、似ているのか。

まっ、それはそれとして今夜のメニューだ。

旨いか美味しいか、問題になった代物は、ミートボールを煮込んだものだ。

何で煮込んだかって？

それは、お婆に訊かなきゃわからないけど、自分のレシピには、こだわりを持っていて、孫のあたしにも、詳しく教えてくれないんだ。えーとね。煮込みのソースの中には、トマトと玉ねぎ。

それから、（あはっ、美味しい）人参も入っているし、セロリとにんにくの匂いもするな。

んっ、バターとチーズも加えてあるなきつと。

蕩けるチーズが、乗ってるんだけど、ソースの中のチーズは、何だろう。チーズっていっぱい種類あるもんね。

いろんな香辛料も入ってるみたいだな。揚げたジャガイモと玉ねぎも入ってる。

ミートボールは、ハンバーグと同じ材料だと思うけど、ハンバーグより柔らかく、揚げてないけどジューシーで、ほのかに甘みも伝わってくる。（美味しいアゲイン）

ご飯は、バターライス。にんにくの香りが少しして、刻みパセリが飾ってあるんだ。

家庭料理なのに、こってるよね。

サラダは、多めのサニーレタスに、きゅうりを薄く輪切りにして混ぜて、ホワイトアスパラと、刻んだトマトが乗っている。

きょうのドレッシングは、オニオンドレッシング。

もちろん、お婆のお手製だよ。

そうそう、我が家にはね、お婆お手製のドレッシングが、常時キープしてあるんだ。

きょうの、おろした玉ねぎと、オリーブオイルと、お酢をメインにしたやつのほか、ごま油と、しょうゆと、お酢と、砂糖のやつ。すって練ったごまと、お酢とお砂糖のやつ。

マヨネーズとフレッシュミルクベースのやつ。

これに、わさびを溶かしたやつと6種類は、必ず置いてあるんだ。その他、マスタードを入れたのとか、ケチャップを使ったりとか、そのときの料理で簡単に作ってしまうのだよ。

何をメインで作ってるかは、大体わかるんだけど、その配合の割合だとか、香辛料で違ってくるよね。それが、難しい。

お婆のうでは、すごい。

スープは、オニオンスープ。こげ茶色をしていて、玉ねぎだなんてわからない。

チキンスープストックに、これでもかと、形がなくなるまで炒めつけた玉ねぎを入れ、ワインだか料理酒だかを入れてある。

下品に思われがちな玉ねぎが、上品な一夜を過ごすのだ。

あれっ。全部、玉ねぎ料理じゃねえか。（再び、美味しいアゲイン）もちろん、漬物付き。

なぜか、きゅうりのぬか漬けが、妙なハーモニーを奏でて、きょうの晩御飯とのコンサートを楽しんでいる。

「あゝっ。美味しかった。」

「んっ。美味しかったな。」

いつものように、沈黙の至高のひと時を過ごした誠とお爺は、旨いではなく（美味しい）を連発している。

お婆は、その言葉に目をきらつと光らせて応え、不敵な笑みをたたえてうなずいていた。

怒っていても、寂しくても、何かの壁にぶちあたっていても、食事の後は、暖かでありながらも、リフレッシュさせてくれる心地よい空気が、漂ってくる。

不思議だ。

なんかわからないけど（よっし！）という気持ちがいってくるんだよな。

これが、まずい食事だとそうはいかないでしょ。

それがわかっていて作ってるとしたら……

やっぱり、あのお婆は只者じゃない。

お爺も誠もあたしも、お婆の腕を信じてるから食事が楽しみで、気持ちよくて満足するんだよな。

もし、まずい物が出てきたらお婆の信頼は、吹っ飛んでしまうだろう。

きつい商売をしてるなお婆も。

一回の食事で、信頼関係がくずれるとは思わないけど……そんなものかもしれないと思うし……

何ていうのかな、家族がみんなで食事をするって、いいよね。

一日の24時間のうちで、食事で顔を合わせるのは1時間もないのにね。

いつも、一緒にいるような。時々、顔を合わせたくないこともあるけど……

一緒に、食べる楽しみを共有してるというか。わかるでしょ？

そのひと時を演出するために、頑張ってるお婆。

小さなことでも、大事に考えようとするお婆に、敬意を表して感謝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9480o/>

私の猫はクリスチャン

2011年10月8日06時47分発行